

研究紀要第 13 号

ひら
未来を拓く力を育成する
「心の教育」の実践的研究

～自分を見つめ他と豊かにかかわる力を養うために～

〈3か年継続研究：2年次〉

平成 20 年 3 月



留萌管内教育研究所

発刊に当たって

今までの感覚では考えられないほどのスピードで教育の状況が変化しています。また、教育課題も山積し、社会の変化と融合してますます複雑化しています。このような中、新しい時代に対応する教育基本法、学校教育法が改正されており、それを踏まえて、学習指導要領の改訂が年度内に行われます。改訂案によると、基本的には「生きる力」をはぐくむ現行学習指導要領の理念を継承し、それを支える「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の調和を重視するものとなっています。授業時数については小学校低学年で2時間増、3年生以降中学校3年生まで1時間増となるようです。

子供に確かな学力をはぐくむためには、基礎的・基本的な知識・技能を習得させ、それを基に思考力・表現力・判断力を育てながら、学習で得た楽しさ、満足感などから、さらに関心・意欲・態度を引き出すなどバランスのよい指導を心がけることが大切です。今、学力低下が懸念されている中で、単に時数を増やせば学力の向上が図られるという単純なものではありません。例えば子供一人一人に満足感、達成感を与えるよう、学習の質や指導の効率を高める工夫をしたいものです。

我々教師は、日々変化する子供の前に立っています。そこでは、いつも同じやり方は通じません。ですから教師自身、日常の子供とのやり取りの中で、喜んだり、悩んだりしながら、子供にとって何がよいのかを自問自答しています。

また私たち教師の指導力は完全なものではありません。指導の得手、不得手があります。ですから、学校間や教育研究所を含めた教育関係機関との連携や各種研修講座等への参加によって、より高いスキルを得る努力が必要です。

留萌管内教育研究所の計画は、3か年計画の2年次を終了しました。前年度の研究基盤を基に今年度は研究協力員、研究協力校の授業による検証を行いました。それぞれの学校や学級の置かれている状況や抱えている課題は同じではなく、その必要とされるものも違っています。しかし、学習の目標やねらいに向かって授業を成立させようと、様々な試行錯誤を経ながら努力を続けるとき、そこに共通の要素が生まれてくることは誰もが理解するところです。

留萌管内教育研究所の研究員はテーマを踏まえながらも協力校、協力員の思いを共有しながら検証授業の検討を行ってきたつもりです。私たちは、今回得ることができた貴重な実践資料を基に来年度の研究に取り組みます。また、この研究が各学校の授業づくりに少しでも役立てられれば幸いです。

最後に、この研究に深い御理解と御支援をいただいた留萌教育局、留萌管内市町村教育委員会、そして、全力を傾注して研究に加わられた研究協力員、研究協力校の皆様から感謝申し上げます。

平成20年3月

留萌管内教育研究所

所長 檜 森 博 仁

目 次

発刊にあたって

留萌管内教育研究所長 檜森 博仁

I	研究の概要	1
1	研究主題	
2	研究主題設定の理由	
3	研究主題の押さえ	
4	目指す子供像	
5	研究の仮説と視点	
6	研究の計画	
7	研究の構造	
II	本年度の研究	9
1	道徳の時間の指導に関して	
2	特別活動の指導に関して	
3	総合的な学習の時間の指導に関して	
III	研究協力校・研究協力員の実践	21
1	心に響く資料の開発・工夫をねらいとした「心の教育」の実践	
	天塩町立天塩中学校 伊藤 麻那美	
2	学校の特色を生かした話し合い活動による「心の教育」の実践	
	小平町立鬼鹿中学校 加藤 晃壺	
3	地域人材・施設を活用した体験的学習による「心の教育」の実践	
	幌延町立幌延小学校 梶 倫之	
IV	研究の成果と課題	53

※ 参考文献リスト

あとがき

I 研究の概要



1 研究主題

2 研究主題設定の理由

3 研究主題の押さえ

4 目指す子供像

5 研究の仮説と視点

6 研究の計画

7 研究の構造

1 研究主題

未来を拓く力を育成する「心の教育」の実践的研究 ～自分を見つめ他と豊かにかかわる力を養うために～

2 研究主題設定の理由

今日的な学校教育の課題から

現代に生きる子供たちは、社会の激しい変化によって将来への展望もちにくくなっている。その背景には、豊かな人間性や社会性をはぐくむ上で重要となる自然体験・社会体験の機会や場の減少、倫理観や社会性の不足、規範意識の低下、自立の遅れ等がある。それらは、学校における暴力行為やいじめ、不登校といった憂慮すべき問題に、大きな影響を与えていると考えられる。

また、最近では、いじめに端を発するとされる中学生の自殺など、早急かつ具体的な手立てが求められている。このような学校教育が抱える問題を未然に防ぎ、また改善へと導くため、豊かな心をはぐくむための教育が求められている。

これまでの研究及び管内の実態から

本研究所では、これまで4次に及ぶ共同研究を行ってきたが、いずれも学習指導に重点を置いて研究を進め、様々な成果を収めてきた。また、研究を推進するに当たり、各教育機関の協力の下、管内教育の実態に照らし合わせ、教育現場で生きる実践を行うべく、研究主題を設定してきた。

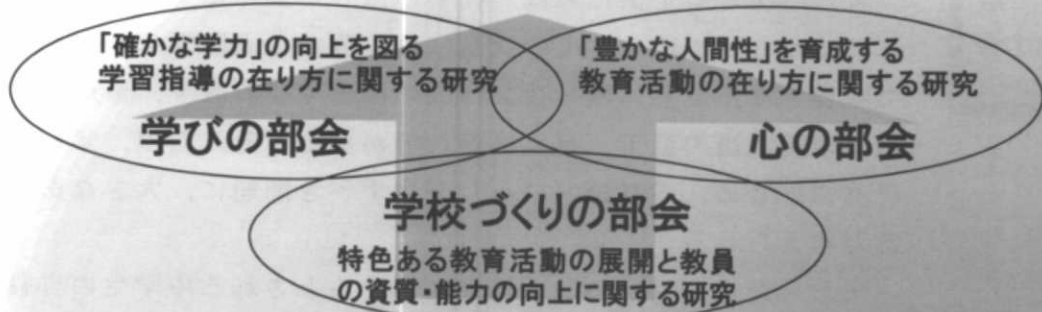
今回新たな研究に取り組むに当たり、これまで推進してきた「学びの教育」と両輪を成すといえる「心の教育」の充実を図りたいと考えた。同時に、心の教育の基礎となる道徳教育に関するアンケートを管内において実施したところ、研究の推進を求める意見が多く聞かれた（※巻末付録『道徳教育に関するアンケート調査』の結果と考察参照）。管内教育の一層の充実のため、本研究主題の下、研究を推進する。

道研連研究主題とのかかわりから

北海道教育研究所連盟（道研連）では、今、学校や教師は何をすべきか、その具体的な方策について模索すべく、研究主題を「『確かな学力』と『豊かな心』をはぐくむ新しい学校教育の創造」と設定して、研究を進めてきた。次のページのように3つの部会を組織し、主題の解明に向け研究を重ねた。「心の部会」では、「豊かな心」をはぐくむために、自らを知り自らを高めようとする中で将来に向けて自己の在り方や生き方を確立し、また他とのかかわりについて考え集団や社会に貢献しようとする中で共に支え合い生きていく力を身に付けさせることが大切であるという基本的な考えを打ち出している。本研究を推進することにより、道研連の研究の深化の一翼を担うことができると考える。

【道研連第12次共同研究の全体像】

「確かな学力」と「豊かな心」をはぐくむ
新しい学校教育の創造



3 研究主題のおさえ

「未来を拓く力」とは

現代の子供たちには、「未来を拓く力」が求められている。「未来を拓く力」とは、現代社会の激しい変化に対応し、常に前向きな姿勢で、未来に夢や希望をもち、自らの人生や未来を切り拓いていく力である。

「心の教育」とは

人が未来に希望をもって生きるためには、それぞれの理想像や目標を明確にし、それを実現するための実践力を身に付けることが必要である。その実践力を養うために、重要な要素となるのが「豊かな心」である。「豊かな心」とは、美しいものや自然に感動する心、正義感や公正さ、生命や人権を尊重する態度などの様々な感性であり、こうした人間性や社会性を育てるのが道德教育である。

「自分を見つける」とは

自らの力で未来を切り拓くには、自己の在り方や生き方を確立しなければならない。その第一歩として必要となるのは、自己を的確に理解し、自己を肯定することである。自分のもつ個性とはどのようなものか、自分の抱える問題は何なのか、自分はどのような存在でありたいのか、そのような自己理解を深め、自己肯定感を高めることで、積極的に自分の生き方や在り方を探究していこうとする姿勢を身に付けることができる。

「他と豊かに
かかわる」と
は

現代の社会や学校が抱える問題、すなわちニートの増加や少年犯罪の頻発、いじめや不登校等の問題の背景には、他者と豊かにかかわり共に生きていく心や方法が身に付けられない状況がある。望ましい人間関係を築くことができなかつたり、互いの人権を尊重できなかつたりする中では、共に支え合い高め合うことは困難である。

互いの思いや意見を適切に伝え合う力を身に付けるためには、集団活動を行う中で、一人一人が自分を主張し、他を認め、生き生きと生活できる風土を形成することが求められる。その中で、個々の子供が心の充実や存在意義を実感できる活動や互いの考えや意見を豊かに表現し合う活動など、集団活動の工夫について研究を進めることが求められる。

また、広い意味での他とのかかわりとして、家庭や地域社会、自然とのかかわりが考えられる。その過程においては、自然体験やボランティア活動等の体験活動が重要となってくる。体験を伴った活動は、自然や美しいものに感動する心や感性、生命を大切にする心や異質なものを尊重し受け入れる寛容な精神を、直接的にはぐくむことができるためである。さらに、それらの活動を通じ主体的に物事に取り組む姿勢を身に付けることも重要である。自ら課題を見付け、学び考え、問題を解決する力を養うことが、未来を切り拓くことにつながる。

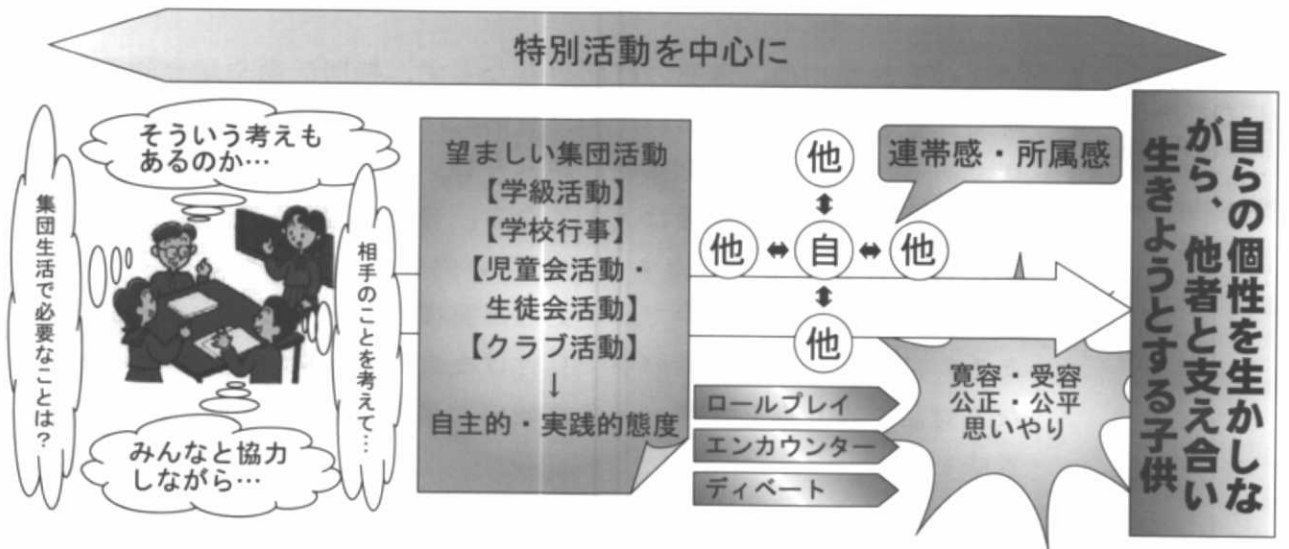
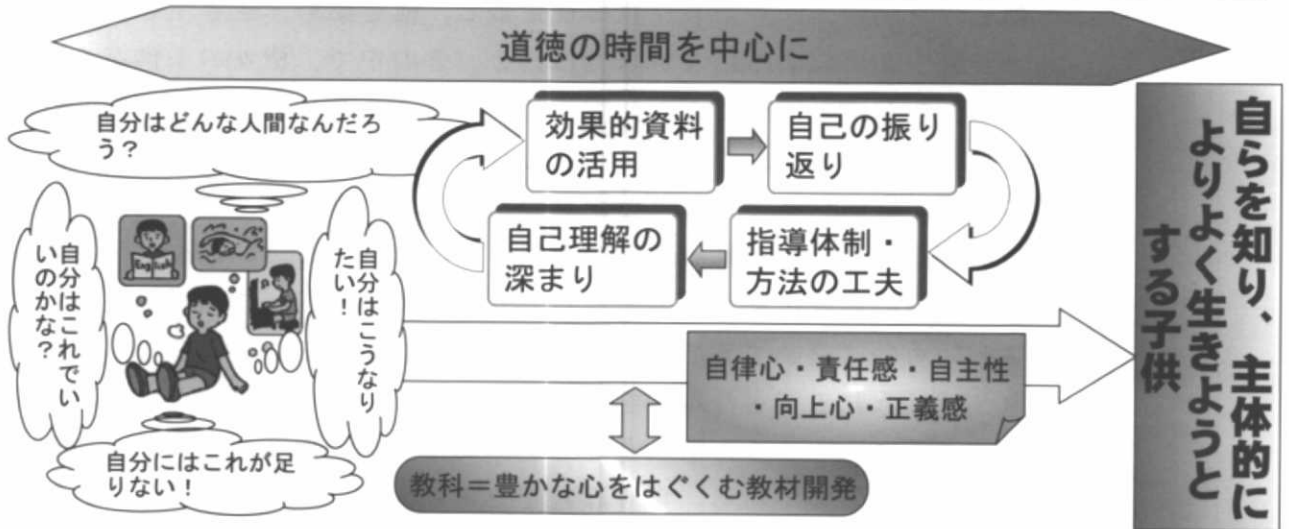
「心の教育」
にかかわる各
領域の連携に
ついて

「心の教育」は、道徳の時間のみならず、特別活動や総合的な学習の時間、各教科の学習においても、意図的に実践し、連携を図ることが大切である。それぞれが有機的に絡み合い、補充・深化・統合することによって、その教育的効果は大きくなる。自己を理解した上で他とかかわり、再び自己を見つめ直すことで深い内省が生まれたり、広い視野で様々なものとかかわる中で、道徳性が発揮され更なる深化を遂げたり、あるいは多様な体験活動の中で見付けた自己の目標を達成するため、内なる対話を繰り返したりと、各領域の効果的な連携を図ることは重要な意味をもつ。



4 目指す子供像

- ◆自らを知り、主体的によりよく生きようとする子供
- ◆自らの個性を生かしながら、他者と支え合い生きようとする子供
- ◆理想の実現に向けて、自らの思いを実践できる子供



5 研究の仮説と視点

道徳の時間の指導に関して

仮説

道徳の時間において、自己理解を促し自己肯定感を高めるような学習活動を実践することで、道徳的価値の自覚を深めさせ、積極的に自己の在り方や生き方を確立しようとする主体性をはぐくむことができる。

研究内容

- ①心に響く資料の開発・工夫
- ②指導体制・方法の工夫
- ③他領域との関連付けを図った指導の工夫

特別活動の指導に関して

仮説

特別活動において、個性を大切にしながら、集団の一員としての責任を自覚できるような学習活動を行うことで、共に支え合って生活しようとする実践的態度をはぐくむことができる。

研究内容

- ①学校行事や学級活動における集団活動の工夫
- ②指導体制・方法の工夫
- ③他領域との関連付けを図った指導の工夫

総合的な学習の時間の指導に関して

仮説

総合的な学習の時間において、子供の実態に応じ、地域や学校環境の特色を生かしながら学習活動を行うことで、自己を実現し、未来を切り拓く実践力をはぐくむことができる。

研究内容

- ①地域環境を生かした体験活動の工夫
- ②指導体制・方法の工夫
- ③他領域との関連付けを図った指導の工夫

6 研究の計画

(1) 研究期間

平成18年度から平成20年度までの3か年継続研究

(2) 研究領域

【道徳】 【特別活動】 【総合的な学習の時間】

(3) 研究の方法

- ① 研究員会議や研究協力校・研究協力員との合同研究会議、道研連との共同研究などを通して、研究内容の検討や交流を行う。
- ② 研究協力校及び研究協力員による授業実践を通して、研究内容についての検証を進める。
- ③ 研究のまとめとして、各年度末には研究紀要を発刊する。

(4) 年次計画

視点1
道徳の時間の指導に関して

視点2
特別活動の指導に関して

視点3
総合的な学習の時間の指導
に関して

平成18年度（1年次）

①心に響く資料の開発
・工夫

深く心に響き、自己
を振り返る中で、道徳
的価値をはぐくむ資料
の開発・工夫

②指導体制・方法の工夫
③他領域との関連付けを
図った指導の工夫

①学校行事や学級活動に
おける集団活動の工夫

個性を大切にしながら
集団の一員として生活で
きる実践的態度をはぐく
む集団活動の工夫

②指導体制・方法の工夫
③他領域との関連付けを
図った指導の工夫

①地域環境を生かした体
験活動の工夫

地域や学校環境の特色
を生かし、他と触れ合う
中で未来を拓く力をはぐ
くむ体験活動の工夫

②指導体制・方法の工夫
③他領域との関連付けを
図った指導の工夫

平成19年度（2年次）

①心に響く資料の開発
・工夫

②指導体制・方法の工夫

自他の経験や考え方を
生かし活動する中で、道
徳的価値観をはぐくむ指
導の工夫

③他領域との関連付けを
図った指導の工夫

①学校行事や学級活動に
おける集団活動の工夫

②指導体制・方法の工夫

自らの考えを表現し集団
で考えを深める中で、生活
にはたらく実践力を養う指
導の工夫

③他領域との関連付けを
図った指導の工夫

①地域環境を生かした体
験活動の工夫

②指導体制・方法の工夫

地域の人材や環境を生か
し探究活動を行う中で、自
己の生き方を考える態度を
はぐくむ指導の工夫

③他領域との関連付けを
図った指導の工夫

平成20年度（3年次）

①心に響く資料の開発
・工夫

②指導体制・方法の工夫
③他領域との関連付けを
図った指導の工夫

①学校行事や学級活動に
おける集団活動の工夫

②指導体制・方法の工夫
③他領域との関連付けを
図った指導の工夫

①地域環境を生かした体
験活動の工夫

②指導体制・方法の工夫
③他領域との関連付けを
図った指導の工夫

未来を拓く力

(5) 今年度の計画

	共 同 研 究	道 研 連 共 同 研 究
4月	・年間計画立案 ・今年度の研究の焦点化	・道研連定期総会 【4月20日(金)】
5月	・第3回合同研究会議 (今年度の研究の推進, 検証授業計画)	
6月	・今年度の研究に関する理論の深化 ・検証授業に関する情報提供 (研究協力員・協力校に向けて)	
7月	・検証授業指導案検討	・北海道教育研究所連盟夏季研究所員 研修会 【7月26日(木)～27日(金)】
8月	・検証授業指導案検討	
9月	・第1回研究協力員検証授業 (幌延小学校=梶 倫之 教諭)	・第62回北海道教育研究所連盟研究発 表大会(空知大会) 【9月20日(木)～21日(金)】
10月	・検証授業指導案検討	
11月	・研究協力校検証授業 (天塩中学校=伊藤麻那美 教諭 大川 智弘 教諭)	
12月	・第2回研究協力員検証授業 (鬼鹿中学校=加藤 晃彦 教諭) ・第4回合同研究会議(研究紀要作成)	
1月	・研究紀要編集作業	
2月	・第5回合同研究会議 (2年次の研究の成果と課題について, 研究紀要原稿の校正)	
3月	・研究紀要第13号発刊	

7 研究の構造

研究主題

社会環境の
変化や生徒
の実態

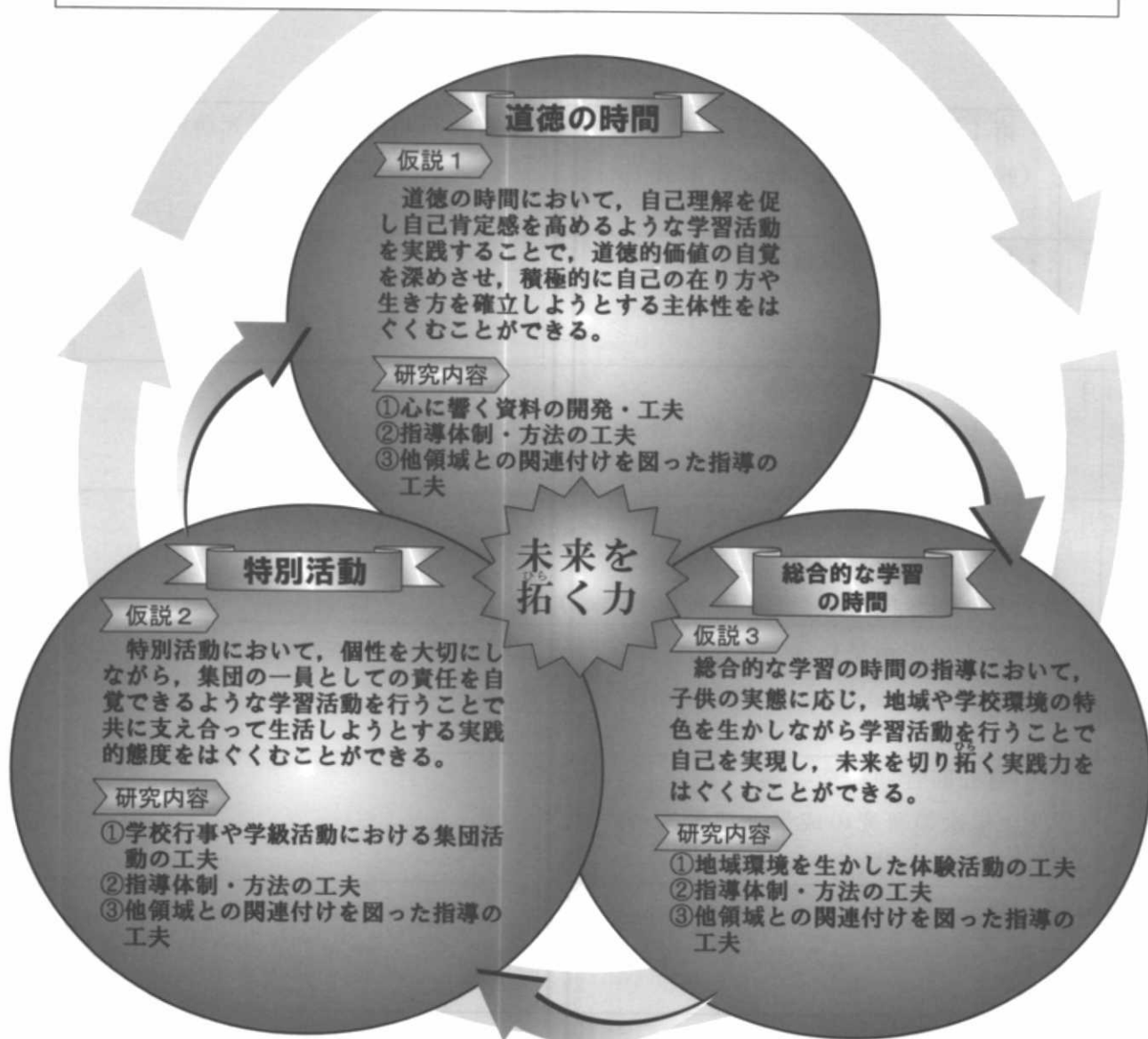
未来を拓く力を育成する 『心の教育』の実践的研究

地域や家庭
・管内教育
機関の要請

～自分を見つめ他と豊かにかかわる力を養うために～

目指す子供像

- ◇自らを知り、主体的によりよく生きようとする子供
- ◇自らの個性を生かしながら、他者と支え合い生きようとする子供
- ◇理想の実現に向けて、自らの思いを実践できる子供



Ⅱ 本年度の研究



1 道徳の時間の指導に関して

2 特別活動の指導に関して

3 総合的な学習の時間の指導に関して

視点1 道徳の時間の指導に関して

心に響く資料の 開発・工夫

学習指導要領に即して道徳の時間の目標を考えた場合、「道徳的価値及び人間としての生き方についての自覚を深める」ことがその一つであるといえる。

道徳的価値の自覚については、発達段階に応じて多様に考えられるが、次の3つの事柄を押さえておく必要がある。一つは、道徳的価値についての理解である。道徳的価値が人間らしさを表すものであるため、同時に人間理解や他者理解を深めていくようにする。二つは、自分とのかかわりで道徳的価値がとらえられることである。そのことに合わせて自己理解を深めていくようにする。三つは、道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題が培われることである。その中で自己や社会の未来に夢や希望がもてるようにする。このような道徳的価値に裏打ちされた人間としての生き方についての自覚を深めることが肝要である。

道徳の時間においては、これらのことが、生徒の実態に応じて、意欲的になされるように様々な指導方法を工夫していく必要がある。

(中学校学習指導要領 解説—道徳編— 文部省)

ここでは、児童生徒の実態把握が重要な意味をもつ。道徳的価値についての理解が不十分である場合、正義感や公正さを重んじる心や生命を大切にし人権を尊重する心などの基本的な倫理観といったものを大切にする態度を身に付けさせなければならない。その上で、現実の自分がどうであるかを振り返らせる必要がある。具体的には感動性を含みもった資料の活用が考えられ、「道徳的心情を高める」ことを大きなねらいとした授業といえる。

また、道徳的価値の理解は見られても、自分とのかかわりの中でとらえることができている場合、「価値選択能力（道徳的判断力）の育成」に重点を置いた授業実践が考えられる。具体的には葛藤^{かつとう}を含みもった資料を活用し、道徳的価値に沿った判断を行かせた上で、過去の自分の経験と結び付けて考えさせる。このことによって、「自分はどのような人間であるのか」という自己理解が促されると同時に、道徳的価値観を自覚させ自己決定能力を育成することができる。

さらに、道徳的価値の理解と価値選択能力の定着がある程度の段階に達している場合、その道徳性をより発達させることが求められる。具体的には、子供たちが判断に迷うような二者択一の問題を有した資料を活用し、考えを深めさせる中で道徳性を広く高めていく方法が挙げられる。ここでは、問題について一定の結論が示される必要はなく、授業終了後に考えの深まりが家族とのかかわりやその後の生活の中にまで継続することが望ましい。それは、道徳的実践意欲と態度の深まりを意味するものである。重視されるべきは思考の過程であり、「より高い道徳性の獲得」あるいは「道徳的実践意欲と態度の育成」を目指す授業という言い方ができる。

指導体制・方法 の工夫

学習指導要領では、道徳の時間における指導の配慮事項の一つが、次のように示された。「学級担任の教師が行うことを原則とするが、校長や教頭の参加、他の教師との協力的な指導などについて工夫し指導体制を充実すること」。これに加え、家庭や地域社会との連携を図り、より豊かな説話や講話を行うことで児童生徒の道徳的心情を高めるなど、指導体制の工夫が求められている。

また、指導方法の工夫については、これまで広く活用されてきた指導方法を生かしながら、新たな指導方法を取り入れ効果的な活用を図ることが重要である。読み物資料や視聴覚機器の利用、話し合い、教師の説話、動作化や役割演技などに加え、観察や調査、実物に触れる活動、コミュニケーションを深める活動などを行うことで、より豊かな道徳教育の実践に取り組む必要がある。同時に、資料提示や発問構成を工夫することも、指導効果を高めねらいを達成するために大切である。

他領域との関連 付けを図った指 導の工夫

道徳の時間は、各教科や特別活動、総合的な学習の時間などで行われる道徳教育のかなめとしての役割を担っており、道徳的实践力を育てることが求められる。

道徳の時間の大きな特徴は、全教育活動で行われる道徳教育との関連を明確にし、生徒の発達段階に即しながら、基本的な道徳的価値の全体にわたって計画的、発展的に指導するところにある。

道徳の時間は、各教育活動において行われる道徳教育を、全体にわたって調和的に補充、深化、統合する時間である。このことを生徒の立場から見ると、各教科や特別活動、総合的な学習の時間などで学習した道徳的諸価値を、全体にわたって人間としての在り方や生き方という点からとらえなおし、自分のものとして発展させていこうとする時間ということとなる。

(中学校学習指導要領 解説―道徳編― 文部省)

本来、道徳的实践は、それを現実的に行うための力、すなわち、道徳的实践力が基盤になれば果たされない。道徳的心情や道徳的判断力、道徳的实践意欲と態度といった道徳的实践力が身に付いてこそ、実際の道徳的实践が可能になるのである。道徳的实践力は、丹念な指導を着実に積み重ねることによって養われるものだからである。

また、道徳的实践力を基に道徳的实践を繰り返すことによって、道徳的实践力を更に高めることができる。つまり、児童生徒一人一人の道徳性は、道徳的实践力の育成と道徳的实践の体験が相互に響き合う中で深まるのである。

道徳の時間に培われた道徳的实践力が、他領域のどのような活動における道徳的实践に結び付くのか、あるいは他領域で行われた道徳的实践の指導が、道徳の時間の道徳的实践力の育成とどのように関連するのかを明確にすることで、学校教育全体において充実した道徳教育を行うことが大切である。

道徳の時間の展開例

『生命を尊重する心を重点的に取り上げた指導』

現代社会の急激な変化に伴い、子供たちが自然と触れ合ったり生命の尊さを感じたりする体験が減りつつある。少年犯罪やいじめ、自殺といった諸問題を解決するためにも、「生命の尊重」（内容項目3-(2)）に関する道徳心を養うことが求められている。

このため、学校全体の道徳教育を見直す中で各領域の関連付けを図り、指導体制・方法を工夫することで道徳的価値を養うことが大切である。

◆ 重点的な指導を行うためのポイント

心に響く資料の開発・工夫

- 生命の尊重に関する学習活動においては、特に道徳的心情を高める資料を開発・工夫することが大切である。生徒の実態に即して、興味・関心をもたせ心を揺さぶるような資料を開発・工夫することが重要である。

指導体制・方法の工夫

- 生徒に身に付けさせるべき道徳の内容項目や活用する資料に照らし、最も効果的と思われる指導体制・方法を吟味することが求められる。生命を尊重する心の育成を目的とする場合、地域人材や施設の活用による指導効果の高まりも期待できる。

他領域との関連付けを図った指導の工夫

- ねらいとする道徳の内容項目について、同時期に複数領域において扱うことで指導効果を高められる。ある領域の活動における生徒の実態や見取りを、他領域の指導に役立てることで、充実した指導展開が期待できる。

◆ 生命を尊重する心の育成を重点的に取り上げた指導計画

「生命を尊重する心」の育成

～総合的な学習の時間～

【食に関する指導】

外国の食生活と日本の食生活について調べたり、自らの食生活について振り返ったりする中で、体と心の調和について考え、自他の健康を心がけて生活する姿勢をはぐくむ。

【薬物乱用防止教室】

地域の警察署の協力を得て、資料や説明を通じて薬物使用の恐ろしさを知り、健康を大切にする態度を身に付けさせる。

～道徳の時間～

【1年－白い腹】

自然を愛し、自他の生命を尊重する態度を養う。

【2年－花に寄せて】

生命に畏敬の念をもたせ、精一杯生きようとする心をはぐくむ。

【3年－忘れていた手紙】

尊い命を守ろうとする医師の生き方を通して、命を全うすることの大切さについて考えを深める。

～特別活動～

【1年－安全な生活】

交通事故を題材に、命を大切に安全に生活することについて考える。

【2年－かけがえない命】

飲酒や喫煙、薬物使用の害について知り、誘いを断る方法をエンカウンター等によって学ぶ。

【3年－健康な生活】

肉体と心の健康について考え、充実させるための手段を話し合う。

【避難訓練・不審者対応訓練・学級花壇整備】

2年－道徳の時間
「マザーテレサの生き方を通して、命の大切さについて考えよう」

生命を尊重する心を育てる道徳の時間の指導

本実践例では、生命を尊重する心を育てるために、学校にある副読本を活用しながら効果的な資料となるよう指導方法を工夫すると同時に、道徳的心情の更なる高まりを促すため地域人材を活用し指導体制についても工夫した。

実践事例「マザーテレサの生き方を通して、命の大切さについて考えよう」(中学校2学年)

◆ ねらい

限りない愛をもって他の生命を大切にしようとするマザーテレサの生き方を通して、かけがえのない生命を尊重しようとする心情を育てる。

◆ 学習指導過程の概要

主な学習活動

- 学級活動で行った「かけがえのない命」を想起する。
- マザーテレサの写真を見て、知っていることを交流する。
- ノーベル平和賞を受賞した際に晩餐会^{ばんさん}を断った理由を考えた上で、マザーテレサの願いを知る。
 - ・「受賞の晩餐会^{ばんさん}は不要です。どうか、その費用を貧しい人たちのためにお使いください。」
- 資料1を読み、自分だったらどうするか考える。
 - ・「マザーは、路上に行き倒れている老婆に出会う。栄養失調でやせ衰え、死人のようにしか見えない～」
- 資料2を読み、院長の言葉について自分の意見をもつ。
 - ・「この病院には余裕がないんですよ。どうせ死ぬに決まっている人間は手当てのしようもないし。カルカッタにはこういう人は何百人といるのですから…」
- 資料3を読み、マザーテレサが始めた「ニルマルーヒリダイ（死を待つ人の家）」という施設の意味について、グループで話し合う。
- 「人間にとっての一番の不幸」とは何なのか考える。
 - ・「最も悲しむべきことは、病気でも貧乏でもない。この世に不要な人間なのだと思いますことだ。」
- ゲストティーチャーである医師（看護師）の話聞き、限りある命の大切さについて考えを深める。

☆特別活動との関連

自分の生活の中で考えた「命を大切にすることの大切さについて思い出させ、活動への関心・意欲を高めさせる。

☆資料の工夫

副読本を活用しながら写真を提示することで、関心・意欲を喚起する。

☆道徳的心情を高める

指導方法の工夫

資料から得た感動を生かし、道徳的心情を高める。また、小グループでの意見交流を行い、意見を表現する意欲を喚起し考えを深めさせる。

☆自己を見つめさせ道徳的価値を養う

与えられた自他の命を大切にすることの大切さを知る。

☆地域人材の活用

ゲストティーチャーの講話を聞き、生命を尊重する心を養う。

視点2 特別活動の指導に関して

学級活動や児童会・生徒会活動、学校行事における集団活動の工夫

特別活動は、「望ましい集団活動を通して」児童生徒の発達を促すという特質をもつ。集団活動を通して、児童生徒の個性の伸長と調和のとれた豊かな人間性を育成することが重要とされてきた。これに加え、現代社会において児童生徒が直面する問題を解決することが、今日求められている。

現在、学校教育においては、不登校や中途退学、いじめの問題、暴力行為や少年非行の問題など、学校への不適応を含め生徒指導上の問題が依然として深刻な状況にある。それは、学校教育の在り方にかかわる問題であると同時に、生徒たちを取り巻く社会環境、家庭環境などの変質と深く関係する。人間関係の希薄化や自己喪失の危険といった状況は、青少年が共通に直面する問題でもある。

それ故、特別活動においては、「望ましい集団活動を通して」という特質を継承しながらも、生徒が学校生活によりよく適応するとともに、学校生活はもとより社会において自己の生き方を主体的に考え、自らの意志と責任をもってたくましく自己実現を図っていく資質や能力を高めていくことが求められている。

(中学校学習指導要領の展開 ー特別活動編ー 明治図書)

このようなことを踏まえると、特別活動におけるねらいは2つに大別される。

1点目は、学級集団の一員としての自覚の深化、個性の伸長、豊かな人間性の育成を、主に学級活動において進めることである。

2点目は、社会の一員としての自覚の深化、基本的なモラルや社会生活上のルールの習得、協力してよりよい生活を築こうとする自主的・実践的態度の育成を、主に児童会・生徒会活動や学校行事において進めることである。

児童生徒の発達段階や実態を踏まえた上で、この2つのねらいについて重点化を図ったり相互に関連させたりする中で、指導の目標を明確にすることが重要である。

指導体制・方法の工夫

具体的な指導体制の工夫としては、学級活動や学校行事に保護者や地域の人を招いて共に活動したり、協力体制の下で指導を行ったりするなど、チーム・ティーチングを行うことで教育効果を高める方法が挙げられる。内容は各学校の実態を踏まえ創意工夫することが重要であるが、例えば、保護者の中学生時代の話から、夢や希望をもつことのすばらしさについて考えさせたり、地域の伝統文化を継承している人や地域経済の発展に尽くしてきた人を招き、自分の住む地域のすばらしさに気付かせ郷土愛を養ったりといった取組が考えられる。また、福祉体験やボランティア活動の際に、近隣の福祉施設や団体の職員を指導者として招く例も挙げられる。

指導方法としては、集団活動を基盤として指導が行われることは一貫して変わらない。特に重視すべきは、体験活動の実施である。学級活動においては「ボランティア活動の意義の理解」、児童会・生徒会活動においては「ボランティア活動などを行う」、学校行事

においても「ボランティア活動など社会奉仕の精神を養う体験」などが内容として示されているとおり、それぞれの活動の場で体験を通して生徒を育成することが重要であると考えられる。他の体験活動としては、幼児、高齢者、障がいのある人などとの触れ合い、自然体験や社会教育施設等の活用による社会体験などが挙げられる。このような体験活動と併せ、ブレインストーミングやディベート、パネルディスカッション、テレビや新聞を基にした話し合い、ロールプレイング、体験発表などの指導方法を効果的に取り入れていくことが大切である。

他領域との関連 付けを図った指 導の工夫

児童生徒の「未来を^{ひら}く力」は、家庭、学校及び社会生活など様々な環境の中で多様な経験を通して育成されるものである。その意味で、特別活動の様々な活動は重要な機会である。

特別活動における様々な実践活動は、集団や社会の一員としての自覚、協力してよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度の育成、人間としての生き方の自覚と自己を生かす能力の涵養^{かんよう}などをねらいとしていることから、特別活動においても道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などが、身近な生活に結び付けて深められていくことが期待される。そのためには、道徳の時間の指導と特別活動における様々な実践とを十分関連付けて進める必要がある。また、具体的な生活や行動に道徳的な理解が生かされるためには、特別活動における様々な活動の場面において、それぞれの特質に応じた適切な指導を行うことが大切である。

道徳教育の目標は、特別活動の実践の場面における指導を通して深められることが多いが、これを更に自覚的なものにまで高め、様々な生活の場面で実際に生かしていく必要がある。

(中学校学習指導要領 解説—特別活動編— 文部省)

特別活動と総合的な学習の時間の連携を考えると、その関連の深さゆえに慎重な対応が求められる。児童生徒の興味・関心や体験的な活動を重視し、人間としての生き方を指導する点などにおいて、両者は共通する。そのため、実際の指導に当たっては、総合的な学習の時間での学習活動が特別活動の学習活動に発展し、特別活動で実践的、体験的に学んだことが総合的な学習の時間により現実的な意味を与え、充実させるという相互補完的で、相互還流的な関係の在り方が探究されてよい。

一方で、両者の類似点の多さから安易に重ね合わせたり同様に扱ったりしないよう留意することも必要である。特別活動においては、具体的に体験し、感じ、考え、学ぶことが重視され、総合的な学習の時間においては、活動の過程で自ら課題を見だし、問題解決力や学び方を会得することが重視される。

特別活動の展開例

『社会の一員としての自覚を養う指導』

現代社会において子供たちが抱える問題の一つとして、集団や社会の一員としての自覚をもてず、責任感が不十分で望ましい人間関係を構築できないといった実態が見られる。このような問題を解決するために、多様な体験活動を通して幅広いかかわりをもたせることが大切である。

◆ 重点的な指導を行うためのポイント

地域環境を生かした体験活動の工夫

○ 地域社会には、生徒の生活と深い関係をもつ施設や、将来的にかかわるであろう施設が数多く存在する。それらを活用し、普段は意識しない地域とのつながりや社会の一員としての責任を自覚させることが大切である。

指導体制・方法の工夫

○ 集団や社会の一員としての自覚を深めさせるためには、多様な「場」で様々な交流を行わせることも大切である。その中で、指導方法を工夫し、一人一人の生徒が責任感や自己指導能力を身に付けられるよう効果的な指導体制を築くことが求められる。

他領域との関連付けを図った指導の工夫

○ 道徳の時間において養われた道徳の内容項目について実践的態様が求められるような体験活動を特別活動で行い、さらにはそれらを振り返り広げ深める発表活動を総合的な学習の時間に行うなどの工夫が考えられる。

◆ 社会の一員としての自覚の育成を重点的に取り上げた指導計画

「社会の一員としての自覚」の育成

～道徳の時間～

【1年－小さな一歩】

人と人のかかわりを大切にし、協力して集団生活の向上を図ろうとする態度を育てる。

【2年－五文字の心】

他人とのかかわりについて考え、温かい人間愛の精神を深める。

【3年－かなわぬボランティア活動】

社会への奉仕の気持ちを理解し、それに伴う実践的態度を身に付け、充実した生活を送ろうとする心情を高める。

～特別活動～

【生徒会活動における地域ボランティア活動】

生徒会が中心となって地域の美化を呼びかけたり冬季の除雪を行ったりする。

【地域行事への参加】

海岸清掃や福祉活動への積極的に参加する態度を養う。

特別活動

「地域の施設を訪問し
社会で生きることに
ついて考えよう」

～総合的な学習の時間～

【地域の伝統芸能学習】

地域に伝わる伝統芸能である踊りなどを学び、伝統を継承することの大切さについて考える。

【福祉体験活動】

アイマスクや車イス、高齢者体験セットなどを活用し、体の不自由な人の問題に気付かせ、自分がどのように生活すべきか考える。

【地域に関する学習】

自分の生活に役立っている公共施設や、地域の歴史的な施設について調べ、地域の一員として生きることを学ぶ。

社会の一員としての自覚を養う特別活動の指導

本実践例では、社会の一員としての自覚を養い、よりよい生活を築こうとする態度を育てるために、福祉施設の訪問を中心に体験活動を行う。実際の体験活動を通して感じたり考えたりすることで、生徒の中に社会的な資質が自発し、また人間としての生き方や自己を生かすことについて、さらに考えを深める契機となる。

実践事例「地域の施設を訪問し、社会で生きることについて考えよう」(中学校1～3学年)

◆ ねらい

地域の福祉施設訪問を体験する中で、「お年寄りのために自分たちにできること」について考えさせ、社会の一員として自覚をもって生きる態度を養い、協力してよりよい生活を築こうとする実践力を育てる。

◆ 学習指導過程の概要

主な学習活動

- 「福祉」という言葉について考え、小グループで話合った後、全体で意見交流しながらその意味を理解する。
 - ・障がいのある人を思いやること
 - ・人と人が助け合うこと
 - ・誰かを支えること
 - ・みんなが幸せになること
- 異学年グループを作りブレインストーミングを行い、自分たちの身の回りにある「福祉」を想起する。
 - ・老人ホーム
 - ・保育園、幼稚園、学校
 - ・診療所、病院
 - ・デイケアサービスセンター
 - ・社会福祉協議会
- 福祉ボランティア活動の意義や心得に関する映像資料を見て考えを深める。
- 地域の福祉の充実のために、自分たちにできることを話合う。
 - ・福祉施設の訪問
 - ・清掃や除雪などのボランティア活動
 - ・年賀状や寒中見舞いの取組
- 総合的な学習の時間に行う訪問活動や清掃活動などについて見通しをもたせる。

☆指導方法の工夫

異学年グループを作ったりブレインストーミングを活用したりするなど、話し合いの形態を工夫し、多様な考えを交流させる。

☆指導体制の工夫

各学年の教師が連携を図り、異学年間の交流が円滑に進むよう心がける。

☆指導方法の工夫

映像資料を活用して生徒の考えを深めさせる。

☆地域環境の活用

地域の自然環境や福祉施設を具体的に取り上げ、自分たちにできることを考えさせる。

☆他領域との関連付け

特別活動において取り組んだ計画や準備の活動を、総合的な学習の時間の訪問活動に生かす。同時に、道徳の時間においても、集団や社会とのかかわりについて考える学習に取り組む。

視点3 総合的な学習の時間の指導に関して

地域環境を生かした体験活動の工夫

地域や学校の特色に応じて総合的な学習の時間の活動を進める場合には、学習素材や施設、人材については、あらかじめ調査することが必要である。自然、歴史、文化、福祉、経済など、あらゆるものが教材化の対象となるため、地域について広く調査し知ることは、より豊かな学習活動の実践を生み出す。もちろん、総合的な学習の時間のねらいを明確にした上で、活用可能な施設や人材を地域に求めることも考えられ、どちらの場合も、活動への協力を依頼できる施設や人材について、データを累積していくことが大切である。

地域環境を生かした体験活動の具体的手順としては、次のような例が挙げられる。

- 1 総合的な学習の時間での活動のねらいに応じた体験活動先を開拓するために情報収集をする。
- 2 活動内容の視点から体験活動先を検討する。
- 3 体験活動先と連絡をとり、体験活動のねらいや内容の確認など、事前の打ち合わせを行う。
- 4 体験活動を行う。
- 5 体験活動後の感想や研究誌など生徒のまとめた作品をもって体験活動先にお礼をし、来年度に向けて打ち合わせをする。
- 6 本年度の課題を検討するとともに、体験活動先を一覧表にまとめ、データを累積する。

(中学校学習指導要領の展開 ー総合的学習編ー 明治図書)

指導体制・方法の工夫

総合的な学習の時間における活動の場は、広範囲に及ぶことが多い。校内においては、図書室やコンピュータ室、場合によっては視聴覚室や進路学習室などの活用が考えられ、これに加えて校外での地域施設の活用も考えられるからである。そのため、校長・教頭を含めた校内の協力体制の確立、特に学年内においては十分な連携を図る必要がある。研究推進係や渉外係、記録係などの役割分担はもちろんのこと、実際の授業においてもティームティーチングを実践することで、児童生徒の学習をより深めることが期待される。一人一人が体験を通して実感し、その過程で自分なりのものの見方や考え方をもって活動を進められるよう支援を工夫することが重要である。

また、地域の人材を学校に招いたり、地域施設を活用したりする中で、指導体制を充実させることも重要である。国際理解、情報、環境、福祉・健康などに関して、児童生徒の興味・関心に基づいた活動を進める中で、地域の人材と協力指導体制を築くことは、活動に広がりや深まりをもたらす。大切なことは「学校を開く」ことであり、「どのような目的で地域の施設を活用したいか」「どのようなことについて協力してほしいか」を明確に伝えることである。指導方法については、学習指導要領に示されている以下の点を踏まえて工夫することが必要である。

- (1) 自然体験やボランティア活動などの社会体験，観察・実験，見学や調査，発表や討論，ものづくりや生産活動など体験的学習，問題解決的な学習を積極的に取り入れること。
- (2) グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態，地域の人々の協力も得つつ全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制，地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること。

(中学校学習指導要領 第1章 総則 第4-5)

まず，活動のねらいや内容に応じて学習形態を工夫することが考えられる。主な学習形態としては，個別学習，学年単位の学習，異学年集団の学習などがある。一人一人が自分のめあてや課題をもち，自分のペースで追究したり活動したりすることが重要な場合は個別学習を行い，また多様な体験に接する機会を多くもたせ，豊かな人間関係の構築や協力性や社会性の育成を目指す場合は学年集団や異学年集団での活動を行うことが望ましい。

また，総合的な学習の時間の配慮事項として，積極的に発表や討論を取り入れることで，思考力や表現力を高めることが求められており，特にグループ討議については次のような方法がある。

- 1 シンポジウム
3～4人の発表者の発表を中心に全体討議を行う。異なる立場や考え方を明らかにできる。
- 2 パネル・ディスカッション
数名の討論者の座談会を聞き，3分の2程度の時間経過後，全体討議を行う。
- 3 質問パネル
パネル・メンバーに対し，1～2名程度の質問者が質問しテーマを掘り下げた後，全体討議を行う。
- 4 ディベート
賛成側と反対側の意見をあらかじめ用意し，討論を進める。意見の相違を明確にするのに役立つ方法である。
- 5 グループディスカッション
5～10名程度で討議を行い，その後全体討議を行う。
- 6 バズ法
一般的には，6・6式討議（6人ずつグループが6分）を行い，その後全体討議を行う。意見を広く求める場合に有効である。

(中学校学習指導要領の展開 ー総合的学習編ー 明治図書)

他領域との関連 付けを図った指 導の工夫

総合的な学習の時間が設けられた背景には，従来の文化的な知識伝達によってはぐくまれる学力に加え，状況を判断し問題を解決していく生きる力が必要であるとの考えがある。道徳の時間や特別活動において扱う人間としての在り方や生き方，自己の進路について考える活動などに関連させ，自分探しの時間として総合的な学習の時間を活用する例などが，連携として考えられる。

総合的な学習の時間は，道徳の時間や特別活動，各教科の内容に照らし合わせ生まれたものであり，常に他領域との関連を重視した活動が望ましい。その場限りの脈絡のない断片的な活動になったり，単に学校行事などにゆとりをもたせるために用いたりしないよう配慮することが大切である。

総合的な学習の時間の展開例

『環境や自然を大切にすることを重点的に取り上げた指導』

現代社会において、地球の環境汚染が大きな問題となっている。テレビや新聞で取り上げられ、生徒の中にも「環境や自然を大切にすることを知識」があるように感じられる。

一方で、身近なこととして問題をとらえ、環境や自然保全のために考えを深めたり行動したりする力が更に求められているともいえる。このような未来において生きる力を養うために、指導方法・体制を工夫し、他領域との関連付けを図ることが大切である。

◆ 重点的な指導を行うためのポイント

地域環境を生かした体験活動の工夫

- 環境や自然に関する学習活動においては、地域の学習素材や施設を活用し体験活動を工夫したり、地域人材に協力を依頼し生徒のものの見方や考え方を広げたりすることが大切である。

指導体制・方法の工夫

- 総合的な学習の時間の活動は、学年集団や異学年集団で行われることも多い。複数の教師が連携を図ったチームティーチングなどの指導体制が考えられる。また、集団活動の特質を生かせるよう指導方法を工夫することも必要である。

他領域との関連付けを図った指導の工夫

- 他領域において環境や自然を題材にしている学習を洗い出し、関連性を明確にした上で、効果的な指導を行う。その際に、特に道徳教育の全体計画に照らし合わせて、「心の教育」の推進を心がけることが重要である。

◆ 環境や自然を大切にすることを重点的に取り上げた指導計画

「環境や自然を大切にすることを」の育成

～道徳の時間～

- 【1年－樹齢七千年の杉】
自然や生命の尊さについて考える。
- 【2年－立石寺】
自然の美しさや自然と人間のかかわりについて考える。
- 【3年－海の不思議】
自然の偉大さや自然を守ることの大切さについて考える。

～総合的な学習の時間～

- 【地球環境や自然に関する調査を基にした学習】
自ら設定した課題についてレポートを作成する。
- 【ゲストティーチャーを招いての講話会】
森作りセンターの職員による講話会を行う。

～特別活動～

- 【1年－宿泊研修】
野外活動を通し、自然の中で活動する喜びを感じる。
- 【2年－登山】
地域の自然に親しむ中で、その尊さについて考えを深める。
- 【3年－修学旅行】
ラフティングや自然見学をする中で、環境保護の意識を高める。
- 【全学年－地域学習】
地域の清掃活動や観察を通し、自分の住む町の在り方について考える。

総合的な学習の時間
「地域の環境や自然
について考えよう」

自然を大切にすることを育てる総合的な学習の時間の指導

本実践例では、自然を大切にすることを育てるために、他領域との関連付けを図った重点的な指導を展開するとともに、海上保安庁の職員の方をゲストティーチャーに招いたり、異学年集団によるグループ活動を行ったりするなど、指導体制・方法の工夫を心がけた。

実践事例 「地域の環境や自然について考えよう」(中学校1～3学年)

◆ ねらい

自分が住む町を清掃活動をしながら観察する体験を基に、地域の環境や自然について考えることや海上保安庁の職員の方のお話を通して、環境や自然を大切にしようとする心情を育てる。

◆ 学習指導過程の概要

主な学習活動

- 生徒会活動で行った地域の清掃活動を通して、考えたことを各自プリントにまとめる。特に事前に設定した個々の目標や課題について考えを深めさせる。
 - ・ごみの種類や量について調査する。
 - 量は予想以上で、タバコの吸い殻や空き缶が多い。
 - ・ごみが捨てられている場所の特徴について調査する。
 - 人目に付かない場所に捨てられている。
 - 海岸には、外国のごみや海水浴客のごみが多い。
 - ・地域の自然環境の特徴を調査する。
 - 海や川、山など多くの自然が、ごみで汚れている。
- 清掃活動を行った異学年グループ内で意見交流を行う。
 - ・異なる視点や共通する意見の交流による考えの深まり
 - ・ティームティーチングによる指導効果の高まり
- ゲストティーチャーである海上保安庁の職員のお話を聞いたり、実験を行ったりする。
 - ・現代の海洋汚染の実態について
 - ・環境や自然を守るためにできること
 - ・一度汚染された水を元通りにするための実験
- 次時の活動に見通しをもつ。
 - ・各グループごとのレポートのまとめや発表について

☆特別活動との関連

自ら体験して感じたことや考えたことを大切にさせる。

☆問題解決力の育成

課題や目標を設定しそれを解決する力を身に付けさせる。

☆望ましい人間関係や社会性の育成

異学年間で活動することで多様なかわりをもたせる。

☆複数指導体制の実施

清掃活動時に引率した教師が継続して支援し、丁寧な指導を行う。

☆地域人材の活用

ゲストティーチャーの講話を行い、より広い視点で環境や自然について考えさせる。

☆表現力や主体的学習態度の育成

Ⅲ 研究協力校・研究協力員の実践



1 道徳

心に響く資料の開発・工夫をねらいとした『心の教育』の実践

天塩町立天塩中学校 伊藤 麻那美 教諭

2 特別活動

学校の特色を生かした話合いの活動による『心の教育』の実践

小平町立鬼鹿中学校 加藤 晃 壺 教諭

3 総合的な学習の時間

地域人材・施設を活用した体験的学習による『心の教育』の実践

幌延町立幌延小学校 梶 倫 之 教諭

心に響く資料の開発・工夫をねらいとした「心の教育」の実践

(中学1年 道徳の時間 主題名『自分の考えに責任をもつこと』)

天塩町立天塩中学校 伊藤 麻那美

1 はじめに

(1) 主題について

生徒は日常生活を送る中で、周囲の言動に感わされたり、自己中心的な考え方で物事を判断し行動してしまったりすることがある。正しいことをしなければならぬという気持ちと、自分にとって都合の悪いことから逃げてしまいたいという気持ちの中で葛藤^{かつとう}をしながら、日々の生活を送っている。しかし、中学生になると、行事や自治的活動等を通して、自らの行動に対して責任をもち、人や社会に対して誠実に物事を行うことの大切さを理解する機会も増してくる。

葛藤^{かつとう}に打ち勝ち、自分や社会に対して誠実に行動していくことは、人間として非常に重要なことである。そのためには自他を尊重し、何が正しく何が誤りであるかを自ら判断し、行動に移すことをできるようにすることが大切であると考え、本主題「自分の考えに責任をもつこと」を設定した。

(2) 生徒の実態

明るく元気な生徒である。力を合わせて一つの目標に向かうことができる。男女ともにリーダー性がある生徒が多い。また、方向を示せば力を発揮できる生徒やリーダーをフォローしたり協力して活動したりできる生徒も多い。

学級全体が明るい雰囲気、問いかけに対する反応もよい。反面、度が過ぎてしまい、切り替えができず騒然とすることも多い。目先の楽しさに心を奪われ、自分本位となってしまう、周りの状況を考えた発言や行動ができない場面も見られる。

仲間意識や連帯感はあるが、お互いに高め合い、よりよい人間関係を築こうという意識が十分に備わっていないため、周囲の雰囲気に流されて自分の思いを伝え切れなかったり、相手によって自分の思いを貫くことができなかつたりする生徒も多く、結果として、他人任せな行動に至ってしまいがちである。

そこで、周りの状況を判断し、誰に対してでも自分の意見に責任をもち主張しようとする意識を高め、それを素直に受け入れられるような、望ましい人間関係の構築に努めたいと考えている。

(3) 資料について

学級の実態として適切な判断力は身に付いているが、周囲の状況や人間関係によって、判断を実行に移せない場面が見られる。お互いを高め合い、よりよい人間関係を築き、自他を成長させるためには、自分の考えに責任をもち、進んで意見を主張しようとする意識や、どんな場面においても、自らの意思を明らかにする強い心をもたせる必要がある。以上の点を考慮し、本資料は、実際に起こりうる状況を想定し作成した。

2 研究内容とのかかわり

未来を拓く力を育成する「心の教育」の実践的研究

～自分を見つめ他と豊かにかかわる力を養うために～

【視点 道徳の時間の指導に関して】

本研究において、道徳の時間の仮説は

道徳の時間において、自己理解を促し自己肯定感を高めるような学習活動を実践することで、道徳的価値の自覚を深めさせ、積極的に自己の在り方や生き方を確立しようとする主体性をはぐくむことができる。

となっている。

現代社会の激しい変化に対応し、自らの「未来を拓く力」を子供たちに身に付けさせるためには、豊かな心をはぐくむことが求められる。美しいものに感動したり、正義や公正さを大切にしたり、あるいは生命を尊重したりするような人間らしい価値観が養われなければ、自らの未来に希望を見いだすことは難しい。また、そのような価値観は、子供たちが自分自身と向き合い、的確に自己を理解し肯定する中で深まるものでもある。この「道徳的価値」と「自己理解・自己肯定」は、互いに密接に関連・補充し合いながら、子供たちの中で深まりゆくものと考えられる。そのような過程の途上で、あるいはそのような過程を経た上で、主体的に自己の理想像や生きる目標を明確にすることが、「生きる力」の育成である。

本時においては、実際に起こりうる状況を想定させる資料を用いて、実際の自分の行動を考えさせながら、自己理解・自己肯定を促す。その上で、相手のことを考えて、正しいことを正しいと言うことの大切さを考え、何が正しく何が誤りであるかを、自ら判断し、行動に移すことができるようになり、さらには、一人一人により豊かな心の育成が図られていくこととなる。これらの学習活動によって、「他人を思いやることのできる生徒」を育成することができると思う。

(1) 心に響く資料の開発・工夫

本時で活用する資料は、学級の実態に合わせて、実際に起こりうる状況を想定したものである。この資料を活用することによって、生徒の心の葛藤を作りたい。

道徳の時間においては、副読本を始めとして、社会問題やテレビのドキュメンタリー番組など、様々な資料が用いられる。多様な資料の活用が考えられる中で、本時においては、自分の考えや気持ちを伝えることの大切さについて生徒に理解を深めさせるために、自作の資料を活用する。そのねらいは、生徒の発達段階や実態に応じた資料を用いて、道徳的価値の自覚をより深めさせることである。中学校1年生という段階においては、行事や生徒会活動に取り組む中で自らの意見が求められ、またその責任について考える機会が増える。多くの生徒は、こうした場面で迷い、考え、判断することを体験している。

本時の資料は、校内において実際に行われる球技大会を題材として作成している。そのため、道徳的価値の内面化、実践への意欲化という点において、大きな効果が期待できると考える。一方で、道徳的価値の把握・追求という点においては、資料を丹念に読み取らせることが重要である。主人公の葛藤^{かつとう}を理解した上で様々な対応の方法を考え、適切な判断を生徒自らが獲得し道徳的価値を自覚できるよう支援したい。

資料の作成に当たっては、用いる表現を精選し、文章量についても適切なものとなるよう心がけた。また、生徒の実態に照らし合わせ、重点的に身に付けさせたい道徳的価値項目を主題として作成した。このように明確な目的の下に資料を開発・工夫することが、生徒の心に響く道徳の時間の実践に結び付くと考える。

(2) 指導体制・方法の工夫

本時では、資料を読んでから、最初に班で意見交換をさせることによって、活発な話し合いになるように配慮している。そして班から学級全体へと意見交流を広げ、他の人の意見を聞かせてから、個人の意見を書かせることによって、生徒一人一人により深く考えさせたい。また、ワークシートや短冊を活用し、活発な意見交流をさせたい。

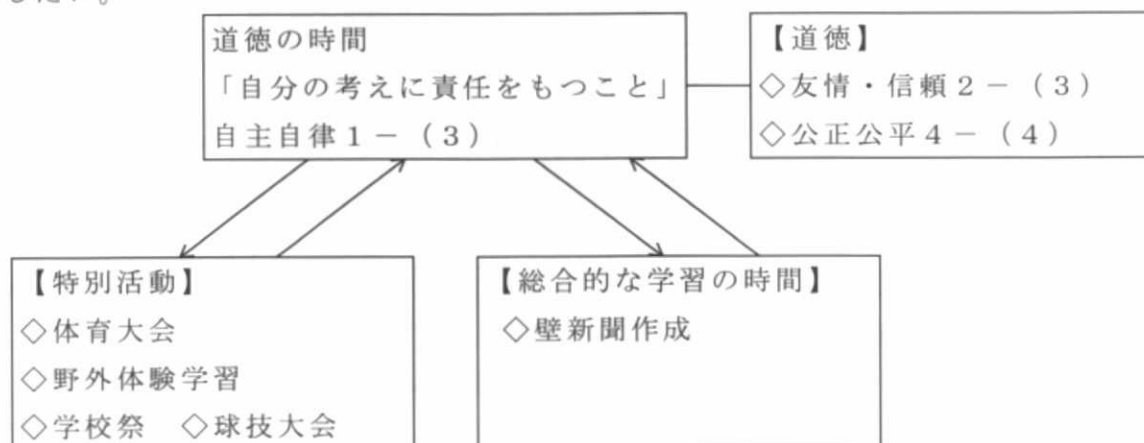
指導体制については、一般的な複数指導体制の構築も考えられるが、指導内容に照らし合わせたとき、普段と同じように1人の教諭が授業を進める形態が、生徒にとって落ち着いた学習環境を保障できると考えた。また、望ましい学級集団の風土を継続指導によって形成するためにも、担任教諭が行う形態とした。

(3) 他領域との関連付けを図った指導の工夫

本時の学習に関して、下記のように、他領域との関連が考えられる。

特別活動の時間との連携については、体育大会や学校祭などの全校活動において、関連付けを図ってきた。自主的に考え行動することの大切さについて、道徳の時間に学習した上で体育大会に取り組みせることで、自己の責任を意識して活動する様子が見られた。また、体育大会における反省を特別活動で行った上で、道徳の時間において集団生活における自己の役割と責任について考える授業を実践するなど、関連付けを図ることで補充・深化し合えるよう取り組んできた。

今後行われる球技大会や卒業式などの行事はもちろんのこと、学級活動における話し合いなどにおいても、道徳の時間で扱う道徳的価値が日常生活に深く結び付いていくように支援したい。








3 授業の実際

(1) 本時のねらい

- ・ 周りに流されることなく、自分が判断したことを相手に伝えようとする意識を養う。

(2) 本時の展開

	学習活動	主な発問と生徒の反応・意識	指導上の留意点
道徳的価値への方向付け	<p>◇生活を振り返り、自分の思いを伝えられなかった場面を思い起こす。</p> <p>お母さんに手伝いを頼まれたとき、やり方が分からなかったけど言えなくて、困ったことがありました。</p> <p>◇課題を理解し、関心・意欲を高める。</p>	<p>言いたいことがあっても言えなくて困ったことがあったら教えてください。</p>  <p>「自分の言いたいことがあっても言えなくて困った」とき、「自分にできることは何か」ということについて考えてみましょう。</p>	<p>☆無理に考えをもたせたり、詳細の説明を強制したりせず、可能な範囲で発言を求める。</p>
道徳的価値の把握・追究	<p>◇資料の範読を聞いて、概要を把握する。</p> <p>◇登場人物や話の内容を確認する。</p> <p>◇登場人物の行動について考え、状況をよくするためにできることを書く。</p>	<p>資料を読んで、「自分にできることは何か」考えてみましょう。</p> <p>話の内容を確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 何の話ですか。 ・ 出てくる人は誰ですか。  <p>はるかにできたことは、どんなことがありますか。できるだけたくさんワークシートに書いてみましょう。</p>	<p>☆生徒に話の内容について質問して答えさせ、状況を的確に理解させる。</p> <p>この気まずい状況の中で、はるかにはもっとできたことがあったはずですね。</p> <p>☆素直に自己の考えを記入できるよう支援する。</p>

	<p>◇個人の意見を班で交流して、まとめる。</p> <p>自分の思ったことをしっかり言う。</p> <p>それぞれの意見のよいところ、悪いところを話合う。</p> <p>◇班の意見を全体で交流して、登場人物の思いに迫っていく。</p>	<p>みんなが書いた意見を班で交流して、まとめてみましょう。</p> 	<p>☆意見が出ない班にはヒントを与えるなど、意見交流が活発に行えるよう支援する。</p>
<p>道徳的価値の内面化</p>	<p>◇はるかの行動を自分に置き換えて、できることは何かを考える。</p> <p>「3人に対して」 ・最初の約束を思い出すべきだよ。 ・自分のことだけではなく、もっとみんなのことを考えようよ。</p> <p>「美香に対して」 ・美香の考えは、間違っていないよ。</p> <p>◇考えたことを発表し、自主的に行動を起こすことの大切さを理解する。</p>	<p>もし自分のはるかの立場だったら、できることは何かを考えてみましょう。</p> <p>「美香に対して」か「3人に対して」か、自分ならどちらに何を話すか、ワークシートに書いてみましょう。</p> 	<p>具体的に何を言ったらよいのか、話かけたらよいのかを考えてください。</p>
<p>実践への意欲化</p>	<p>◇本時の学習を振り返り今後の生活に生かすイメージを作る。</p>	<p>今日の学習を通して、考えたこと、感じたことをワークシートに書いてみましょう。</p> 	<p>これから同じような場面を経験することがあるかと思いますが、今日学習したことを生かして、自分はどんなことができるかということを考えて行動してもらいたいと思います。</p>

4 成果と課題

(1) 心に響く資料の開発・工夫

[成果]

- ・校内で実際に行われる球技大会を題材として作成した資料を活用することにより、生徒は集中して授業に取り組むことができ、また授業のねらいに沿った意欲的な思考を促すことができた。
- ・広く資料の開発・工夫に取り組む中で、生徒の実態に合った資料、授業のねらいに迫る資料を取捨選択することができた。

[課題]

- ・既存の資料の効果的な活用についても考え、またそれを自作資料に生かすための手立てを工夫するなど、広い視野の下に心に響く資料の開発・工夫を考えることが大切である。
- ・自作資料を使用して授業を行う場合、授業のねらいに迫るためになぜその資料なのかという根拠を明確にしておく必要がある。
- ・自作資料作成にあたっては、生徒が共感的に理解できる内容であるのか、実在の人物を扱う場合には与える影響はどの程度なのかなど、様々な面から検討を行う必要がある。

(2) 指導体制・方法の工夫

[成果]

- ・授業者が、資料を読んだり、授業内容に合った雰囲気づくりを行ったりしたことで、生徒は真剣に授業に取り組むことができた。
- ・一人で考える場⇒グループ活動⇒全体討議という学習形態によって、自分の考えを全員がもつことができた。

[課題]

- ・授業のねらいに合わせて中心発問、補助発問の位置付けを明確にすることが必要である。
- ・授業内容や展開を考え、適切に時間配分を行うことが大切である。
- ・生徒一人一人を丁寧に見取り、価値ある考えを全体交流に生かすことで、学習をより深めることができる。

(3) 他領域との関連付けを図った指導の工夫

[成果]

- ・様々な価値項目について、異なる領域の連携を図ることで、より効果的な学習を行うことができる。

[課題]

- ・「道徳の時間」においてねらいとする価値項目を、生徒の実態などに合わせ計画的に位置付けた上で、他領域との関連を図ることで、道徳教育を更に充実させることができる。

《資料》

もうすぐ校内球技大会。種目はバレーボール。クラス中がその話題で持ちきりである。やるんだったら優勝を目指したいという気持ちは、クラスの誰もがもっている。しかし、中には球技を苦手としている人もいる。チーム編成をどうしたらいいのか、学活で話し合われることになった。

『絶対に勝てるチームを1つ作って、チーム優勝ねらうのがいいと思います。』

『でもそれだったら、つまらないよ。バランスよくチームを決めて、苦手な人をカバーしあったほうが、球技大会の目的の「クラスの団結力を深める」も達成できて楽しいんじゃない?』

『うまい人だけでチームを作って優勝できても、みんなで喜べない気がするな…。』

多数決の結果、「みんなが楽しめること」、「バランスよくチームを作ること」を考えて、体保係を中心にチームを編成することに決定した。実ははるかも体保係の一員。どんなチームになるのか、どんな話し合いになるのか、はるか自身も楽しみだった。

放課後、係で集まり、チーム編成を考え始めた。考えていくうちに、学活の時間に決めた約束事を忘れた発言が出てくるようになっていった。

石川 『やっぱりバランスよくとか、みんなが楽しめるチーム作りなんてちょっと無理があるよなあ。優勝したいなら、強いチームを作るべきだよ。』

吉田 『だったらさ、みんなにばれない程度にちょっと強いチームを作ろうか。』

小山 『いいんだけどさ、それってばれた時やばくない?そりゃ、勝ちたいけど…。』

石川 『勝てるチーム作ったって、みんな文句言わないって!』

小山 『みんながそれでいいなら、そうするか。な?』

はるか 『……。』

美香 『ちょっと待ってよ、クラスで決めたことを無視するわけにはいかないよ。みんなのことを考えて決めるべきだって。』

石川 『じゃあ、どうするんだよ?絶対みんなが納得するようなチームなんてできないって。だったら勝てるチーム作ったほうがいいって!』

吉田 『そうそう、そうしちゃおうよ。』

小山 『美香は固すぎるんだよ。美香だって勝ちたいだろ?』

石川 『そうだよ。このことはここだけの話ってことで。な?』

はるか 『……………うん、そうだね…………。』

美香 『でもやっぱり……………よくないよ、そんなの。』

小山 『なんだよ、まだ言うつもりかよ。もう決まったんだ、文句は言うなよ。』

美香 『……………。』

正直、はるかはすっきりしなかった。うつむいたまま顔を上げない美香に、はるかは周りの目もあって声をかけることができなかった。

『どうしたらいいのだろう…………。』 はるかは、自分がどうするべきか決断することができないでいた。

学校の特色を生かした話し合い活動による「心の教育」の実践

(中学3年 特別活動 題材名『ボランティア精神を高める』)

小平町立鬼鹿中学校 加藤晃杏

1 はじめに

(1) 生徒の実態

本学級の生徒は概してまじめであり、言われたことに対しては責任をもってやり遂げる姿勢が定着している。しかし、自ら課題を見付け積極的に取り組んでいく力はまだ十分ではない。授業中は、控え目でおとなしい生徒が多く、人に頼る様子が見られる。また、話し合い活動でも自分の意見をもってはいるものの積極的に発言する生徒は少ない。

中学3年生の今、部活動が終了し進路に向けて集中する雰囲気生まれており、この先、他人のことよりも自分のことで精一杯という生徒も増えるであろう。心に余裕のない時期ではあるが、子供たち一人一人が、学級の仲間や地域の方々、そして家族に見守られはぐくまれていることに気付くことによって、残り少ない学校生活を一層充実させることができると思われる。

本時においては自分を支えてくれる地域の方々のために何ができるかを考え、学級の、そして社会の一員として、たくましく豊かに生きる態度をはぐくんでいきたい。

(2) これまでの奉仕活動の様子から

子供たちは入学以来、生徒会行事として清掃作業や除草、除雪など毎年4回の「ボランティア活動」を行っている。事後指導として作文を書き、体験で得たものの内面化を図っており、勤労や社会への奉仕の気持ちが育ってきている。

しかし、子供たちの反省の中には「来年も頑張りたい」という「人任せ」とも思える感想もあり、ボランティア活動を今後の自分の生き方に生かそうとする意識が不足しているように思える。実際に活動する姿を見ると、番家の清掃については国の重要文化財ということもあり、子供たちは興味・関心をもって活動しているが、除草や除雪については受け身的な様子が見られる。

今回の「除雪の改善策の話し合い」を行うことで、3年生としての役割とその責任の遂行に努めようとする意欲を改めて喚起したい。そして、将来にわたってボランティア活動を行う意義について考えさせ、また将来、社会人としてボランティア活動に積極的に参加していく意欲や態度を養うために本題材を設定した。

2 研究内容とのかかわり

【視点 特別活動の指導に関して】

本研究において、特別活動の時間の仮説は

特別活動の時間において、個性を大切にしながら、集団の一員としての責任を自覚できるような学習活動を行うことで、共に支え合って生活しようとする実践的態度をはぐくむことができる。

となっている。

「豊かな心」をはぐくむために、道徳の時間においては、自己を深く見つめることに主眼が置かれているのに対し、特別活動では、自己理解に立った上での他者との豊かなかかわりに重点を置いている。それは、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図るとともに、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こうとする主体的・実践的な態度を養う。」とする特別活動のねらいと合致している。

(1) 学校行事や学級活動における集団活動の工夫

学級として共通の目標をもち、自分たちで活動を計画し実施していくことで、共に支え合って生活していこうとする実践的態度が育っていく。本時においては「相手が喜ぶ」をキーワードとして共通の目標を意識させて話し合い活動を行っていく。

3学期に実施する中学校生活最後のボランティア活動が一層充実したものになるように改善策を話し合い、要望書にまとめ生徒会に上申する。この話し合いを進める中で、今まで行ってきた自分たちの活動の意義を深め、今後のボランティア活動に臨む姿勢が確立されると考えている。

2年時の感想を見てみると、多くの生徒が「最後のボランティア活動を充実させたい」という思いをもっており、意欲的な話し合いがなされると思われる。

(2) 指導体制・方法の工夫

本単元の授業者となるのは、3学年に所属する副担任の教諭であり、国語科を担当している。「学級活動の時間」の指導においては、計画に基づき担任教諭が主になって行う形態が一般的であるといえる。それは、望ましい学級集団の風土を継続指導によって形成する上で必要なことだからである。一方で、普段と異なる授業者が主となり学級活動の時間の指導を行うことで、生徒の感じ方が変化し、より広い視野で考えを深める効果が期待できる。

*本単元の指導体制について、

- ①国語科の【話し合うこと・考えること】の指導内容とかかわっていること。
- ②年間4度の奉仕活動が話し合いの基になる。活動に当たっては全校生徒が縦割りの班となり、全教師が指導者となって活動を共にしている。生徒と一緒に汗を流したという点からいっても、担任以外が主となり指導することも可能である。

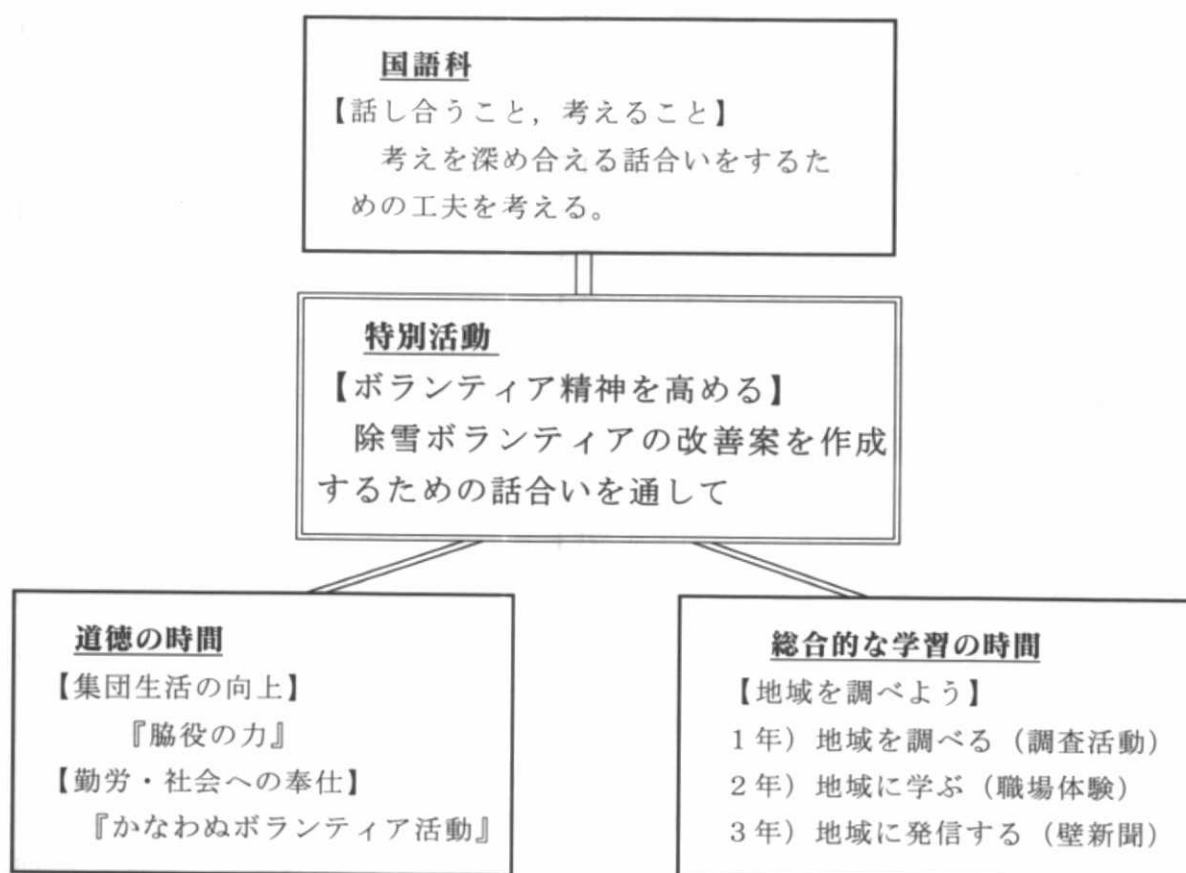
③担任教師とTT体制を組み、子供たちの支援と見取りをお願いする。

*指導の方法について

本授業においては、今まで自分たちの行ってきたボランティア活動を振り返らせ、その意義を確認するとともに、3学期に行う最後の除雪作業を一層実りあるものにするための改善策を考える。そして、生徒会に対する学級の意見や要望をまとめていく。その話し合いをする中で、互いの考えを学び合う。話し合いの場面では生徒が司会をするのが基本であろうが、本単元を指導するに当たっては授業者が司会を務める方が効果的であると思われる。本授業を通じて、学校で行ったボランティア活動が将来にわたって継続して行われるよう意欲付けをしたい。

(3) 他領域との関連付けを図った指導の工夫

「集団や社会とのかかわり」については、学校活動のあらゆる場面で関連付けた指導を行うことができる。本校で行われている実践例は、次の通りである。



3 題材の目標

- (1) 社会に奉仕し、貢献することの意義を自覚する。
 (2) 奉仕を自らの充実感として感得し、進んで実践しようという態度を育成する。

4 題材の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解
ボランティア活動に関心を持ち、意欲をもって自己のよさを発見し、積極的に伸ばそうとしている。	社会への関心を高めるとともに、学校生活の意味や課題、自己の生活の目標や生き方について考え、判断している。	主体的に学び方を身に付け、ボランティア活動に必要な情報を収集、活用し生かすことができる。	ボランティア活動の意義、参加の在り方についての理解を深める。

5 題材の指導計画

内 容	生徒の主な活動	支援 (○) と評価 (☆)
<ul style="list-style-type: none"> かつて行った除雪ボランティアの反省点をまとめる。(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ①除雪ボランティアの意義を話し合う。 ②過去2年間の除雪活動を振り返り、困ったことや気付いたことを思い起こし、反省点を挙げ改善策を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆最後のボランティア活動に対して意欲を高めている。 ○1・2年時の活動後の感想文を紹介し、そこから反省点を見付けるようにする。
<ul style="list-style-type: none"> お年寄りが喜ぶ活動にするために自分たちができることを考え、生徒会への要望をまとめる。(1) 本時 	<ul style="list-style-type: none"> ①生徒一人一人が活動計画の素案を考える。 ②個人の意見をグループでまとめた後、全体交流を行い、学級としての意見や要望にまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○前時で挙げられた反省・改善策を参考にするように助言する。 ☆活動をよりよいものにするため進んで意見を述べている。
<ul style="list-style-type: none"> 除雪活動を実際に行い、感想をもつ。(2) 	<ul style="list-style-type: none"> ①学習で学んだことを生かし、独居老人宅の除雪ボランティアを行う。 ②作業終了後に感想を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆自分たちの意見・要望が活動に生かされたことをとらえ、充実感をもって作業している。 ○昨年までの活動と今年の活動を比較させる。




<p>・将来にわたってボランティア活動に取り組む意義を考える。 (1)</p>	<p>① 3年間のボランティアを終えた感想を書き、交流する中でボランティア活動を行う意義を改めて考える。</p>	<p>☆将来にわたってボランティアを続けようとする気持ちが育っている。 ○「線香花火の心」の逸話を用いる。</p>
---	--	---

6 授業の実際

(1) 本時の目標

- ・お年寄りがもっと喜ぶ除雪ボランティアにするため、実現可能な工夫を考える。

(2) 本時の展開

	学習活動	生徒の活動と主な発問	支援・評価の実際
導入	<p>◇前時を振り返り、お年寄りが喜ぶボランティア活動にするため、生徒会へ要望していくことを確認する。</p>	<p>お年寄りがもっと喜ぶ除雪ボランティアにするために、自分たちができることを考え、生徒会に提案しよう。</p>	
展開	<p>◇一人一人が活動内容を考える。</p> <p>実際にやるとなったら、大変だわ。私たちに何ができるかしら。</p> <p>◇個人の意見をグループとしてまとめる。</p> <p>事前の下見は欠かせないね。それから、雪がべとつかないよう時間帯を変えよう。記念写真を撮るのはどうだろう？</p>	 	<p>○前時に挙げられた改善策を参考にし記入するように指示した。 ☆実現可能な活動を選んだり、考えたりできるか。</p> <p>○活発な話し合いがなされるように話し合いの方向付けをした。 ☆自分の意見を積極的に述べようとしているか。</p>



はがきや回覧板などで注文を取るのはどうだろう？ いい考えだね！

去年、スコップが足りなかったり壊れたりしたから、予備を準備しておこうか。
除雪だけでなく、氷割りもしたら…。

◇各グループの要望を短冊に書いてはり出し、学級の要望へとまとめていく。



あっちの班もいろんなこと考えてるなあ…。
私たちと同じ意見もある…。

【A班の改善案】

- ・ 事前に下見をし、メンバーの人数や道具の数を考える。
- ・ 除雪の時間帯を考える。
- ・ 屋根の雪下ろしもできる範囲ではどうか。
- ・ 一度だけでなく何回か行ってはどうか。
- ・ 記念写真を撮る。

【B班の改善案】

- ・ はがきや回覧板などで注文を取る。
- ・ 班長さんが担当区域を下見する。
- ・ 予備のスコップを用意する。
- ・ 除雪だけでなく、玄関前の氷割りをする。
- ・ 記念写真を撮る。



それぞれの改善案について理由を説明しながら、各班の代表者は発表をお願いします。

○提案理由の説明



☆よりよい活動にするため進んで意見を述べようとしているか。

毎年1回しか除雪してなくて、それでは不十分なので、何回か行った方が…。
除雪するだけでなく記念写真も撮ったらお年寄りの思い出に…。

○質疑応答

○補足事項の確認

☆ボランティアに対して相手の立場に立った考えをもつことができるか。

◇提案を再検討する。

全体の出されなかった改善策について再度検討しよう。

何だろう？事後活動かな…。



先生が予想していた意見はだいたい出ました。でも、個人で考えた改善案の中に、もう一つ名案があると思うんだけど、気付いた人はいるかな？

もう一つの名案

◇前時に提案した生徒が理由を説明する。

作業が終わった後、次に除雪する時も作業しやすいようにできることをする。

すばらしい考えですね。これも要望書に載せてもいいかな？



自分たちの活動が終わった後でも雪は降るし、そんなとき、お年寄りが少しでも楽に雪を捨てられるようにしたいということです。

全員賛成で
要望事項決定！

終末 ◇本時の学習を振り返り、感想を書く。

いろんなこと考えたなあ…。去年以上に喜んでもらえるボランティアができそう！

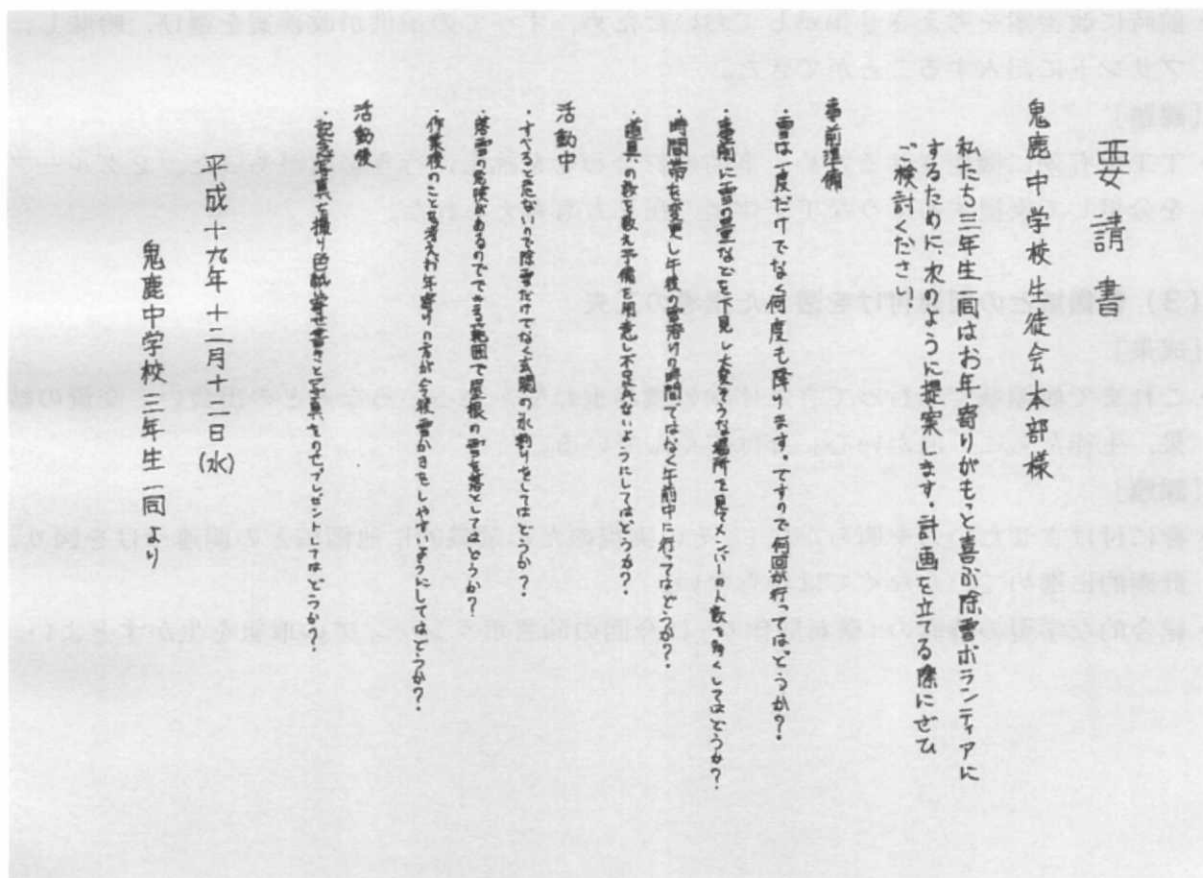


決定した要望事項をプリントに書き（別紙）、学級役員が生徒会本部に提出。

7 授業を振り返った感想

- お年寄りが何を望んでいるのか考えることができたし、充実していたと思う。
- テーマの「お年寄りがもっと喜ぶ」と「自分たちのできること」を考えながら新しいアイデアを出し、よりよいボランティア活動になるようにお年寄りの方のことを考えながら学習できた。もし、今日みんなで考えた意見が通ればテーマどおりのボランティア活動になると思います。
- 生徒会にアイデアを学級から出すのは、たぶん初めてだと思う。生徒総会以外でだから、いい経験になったと思う。今年の除雪ボランティアをもっとがんばろうと思った。
- 今日は緊張したけど、いつもどおり楽しく授業することができた。
- 僕たちが考えた案を生徒会で取り入れてくれると、昨年や一昨年よりも活発な活動になるのではないかと思った。
- 質問は、出すのは少なかったけど、ちゃんと話し合えたと思います。人にまかせきりにしたので積極的にもうちょっとやったらいいと思った。
- 他の班より書けなかったけどしっかりできた。
- 喜んでくれるような活動にするのは難しいかなと思ったけれど、自分で考えたり、他の人のアイデアを聞いたりして、よりよい活動にできる気がしてきた。

8 完成した要請書



9 成果と課題

(1) 学校行事や学級活動における集団活動の工夫

[成果]

- ・最終的に自分たちの要望を生徒会へ提案するという形をとったため、それが目的意識の高まりにつながり、授業への意欲を喚起することができた。
- ・今回の授業を通し、自分たちの意見・要望が学校の活動をよりよくすることを生徒は学ぶことができた。生徒会の活動が教師主導型で進められたり、活動がマンネリ化したりすることを打破し、生徒主体の活動が一層進められるきっかけとなった。

[課題]

- ・個の意見、少数意見を大切にするようなルールや支援の手立てがあるとよかった。
- ・単なる改善点の列挙ではなく、「～だから」という理由付けを個人で考える段階から強く意識させるべきであった。

(2) 指導体制・方法の工夫

[成果]

- ・活動のテーマ(キーワード)を過去の活動(実体験)の感想・反省を基に設定したため、テーマを自分に引き寄せて、より強く意識化を図ることができた。
- ・「相手が喜ぶ」というキーワードを生徒が十分意識して活動した結果、相手を思いやる心をはぐくむことができた。
- ・前時に改善案を考えさせ掲示しておいたため、すべての子供が改善案を選び、吟味し、プリントに記入することができた。

[課題]

- ・TTを有効に機能させるため、事前の打合わせを綿密に行う必要があった。2グループを分担して支援するようなTT体制の在り方も考えられた。

(3) 他領域との関連付けを図った指導の工夫

[成果]

- ・これまで他領域でも行ってきた体験の積み重ねや、いろいろな人との出会い、交流の結果、生徒たちに「温かい心」をはぐくんでいる。

[課題]

- ・身に付けさせたい力を明らかにし、その実現のため意識的に他領域との関連づけを図り、計画的に進めていかななくてはならない。
- ・総合的な学習の時間の「壁新聞作り」に今回の除雪ボランティアの取組を生かすとよい。

10 除雪ボランティアの実際

(1) 事前活動について

3年生が提出した要請書を生徒会本部の生徒が検討し、事前の「作戦会議」が行われた。教師が撮影した除雪現場の写真を基に担当人数や作業手順、必要な用具などについて、全校生徒で話し合い活動を行った。その結果、積雪量の多い場所に人数や用具を優先的に割り当てるなどの工夫がなされた。

自ら作成した改善案を基に話し合い活動を行うことで、これまで以上に責任感や自主性をもった取組が見られた。また、改善案の中には実現困難な取組もあり、その意味でも「ボランティア」について考えるよい経験となった。限られた条件の中で、自らできることに取り組むことの大切さについて、生徒たちが理解を深める様子が見られた。



(2) 当日の除雪活動について

2月12日、冷たい風が吹く中、実際の除雪活動が行われた。生徒は、汗まみれになりながら黙々と作業に取り組み、約10戸のお宅の除雪をやり終えた。活動の最中には、お年寄りから感謝の言葉をかけられ、うれしそうな笑顔を浮かべる光景や、効率的な除雪の方法について話し合いながら活動する様子が見られた。

生徒は、これまで以上に積極性をもって除雪ボランティアに取り組み、作業を終えた後、大きな充実感を味わうことができた。これは、「お年寄りがもっと喜ぶ除雪ボランティア」について事前に学習したことで、ボランティア活動の意義に対する理解の深まりが、他者と支え合い生きようとする意識の高まりに結び付いたためと考えられる。

除雪活動当日の様子

作戦会議で話し合った用具が全部そろっているか、確認してから出発しよう。



私たちの班は早く終わったから手伝いに来たよ。みんなで協力して、少しでもお年寄りに喜んでもらえるようにしよう！



窓の前に雪が積もっていると、家の中が暗くなるよね…。大変だけど、頑張って除雪しよう！

(3) 除雪ボランティアを終えて

除雪作業を終え汗も引かない中、生徒はそれぞれの思いを感想文に書き表した。要請書の提出は、生徒に大きな充実感をもたらし、今後もボランティアを続けていこうとする気持ちが高まった。これまで継続して取り組んできたボランティア活動により、生徒の中に「勤労」や「社会への奉仕」、「思いやり」などの心がはぐくまれていることを、本実践を通じて確認できた。

- ◇この活動のために、生徒会へ要請書を作りました。そのおかげで去年よりスムーズにできたと思います。このボランティアは鬼鹿中学校で行っているボランティアの中で一番地域の方に近い活動なので、喜んでもらいよかったです。
- ◇最後のボランティア活動は、自分たちで要請書を提出し、例年よりもよいボランティア活動になったと思います。今年は準備がしっかりできていたせいか、いつも以上に早く終わり、他のところを手伝いに行きました。最後のボランティアは楽しく思い出に残るものでした。
- ◇今年は3年生が要請書を出したことで、下準備等をしっかり行うことができたと思います。特に氷を運ぶのが大変でしたが、がんばった分、喜んでもらえてよかったです。とてもよい活動になったと思います。
- ◇去年よりも除雪がしやすく、一人一人一生懸命やっていました。最後のボランティアでしたが、僕なりにしっかりできたと思います。
- ◇これからはボランティアを行うことも少なくなるとは思いますが、中学校で学んだことをしっかり生かしていきたいです。
- ◇今年のボランティアはみんなで積極的に行うことができたと思います。そして、お礼を言われたときは本当にうれしかったです。作業が始まるとみんな寒さを忘れ一生懸命に取り組みました。とても充実したボランティア活動だったと思います。
- ◇「ありがとう」という言葉を聞いてボランティアをやってよかったと改めて思いました。今回の作業でよかったと思うことは去年までしていなかった玄関前の氷割りをしたこと。3年間を通して小さな心配りができるようになったと思います。中学校は終わりですが、違うところで地域に貢献していきたいなと思います。

地域人材・施設を活用した体験的学習による「心の教育」の実践

(小学5年 総合的な学習の時間 単元名『広げよう バリアフリー』)

幌延町立幌延小学校 梶 倫 之

1 はじめに

(1) 今日的な課題から

現在、日本の社会福祉政策では、日本国憲法第25条第2項（生存権）を保障する政策として、「高齢者福祉」「障害者福祉」「児童福祉」などが確立されている。また、法律的にも「障害者自立支援法」「ハートビル法」「交通バリアフリー法」など、「福祉社会」の実現のための取組が、国や企業によって進められつつある。しかしながら、すべての人たちが幸せに暮らすことのできる社会を築くためには、更なる努力が求められている。子供たちを含めた国民全体が、福祉への関心を高め、望ましい社会の実現のため、自らができることに気付き、考え、行動することが必要である。その第一歩として、福祉社会の実現のためには物質的支援や環境整備のみならず、助け合い、支え合う心をもつことが大切である。

このような状況の中、理想的な社会を築くため主体的に生きようとする子供たちを育成することが、学校教育に求められている。小学校教育においては、人間の望ましい生き方や在り方を考えさせ、自らの目標に向かって積極的に生きようとする態度、「生きる力」を養うことが重要であると考え、本単元を設定した。

(2) 体験活動の繰り返しの中で

子供たちを取り巻く社会には、様々な年齢の人々が、それぞれ異なる生活を送っている。体験活動を通してそのような人々とかかわることで、他者を認め社会の中で広い視野をもつきっかけとさせたい。また、思いやりの心をもち社会生活を送るためには、まず相手の考えや気持ちを受け入れ、理解しようとする姿勢を身に付けることが必要である。体験活動を行う中で、常に相手の立場に立ち、考えて行動することを意識させたい。

具体的な体験の場として、本単元では、車いすを利用したりそれを介助したりする体験や、バリアフリー設備の設置状況を調べる町探検を設定する。これらの活動を行うことで、社会では様々な人々が生活していることを理解させ、「みんなが助け合い、励まし合いながら、すべての人が幸せに暮らせるようにしていく」福祉社会について、学習を深めさせることができると考える。

(3) 人との豊かなかかわりから

本単元では、体の不自由な方や介護に携わる方をゲストティーチャーとして迎え、お話を聞かせていただく場面を設定している。この学習を通して、調査活動や車いす体験で得た知識や考えについて、補足や深化、修正を促すことができると考える。子供たちとは異なる視点から意見をいただいたり、子供たちの考えを評価していただいたりする中で、新たな気づきが生まれ、視野が広がり、更に学習を深められると考える。

2 研究内容とのかかわり

未来を拓く力を育成する「心の教育」の実践的研究

～自分を見つめ他と豊かにかかわる力を養うために～

【視点 総合的な学習の時間の指導に関して】

本研究において、総合的な学習の時間の仮説は、

総合的な学習の時間の指導において、子供の実態に応じ、地域や学校環境の特色を生かしながら学習活動を行うことで、自己を実現し、未来を切り拓く実践力をはぐくむことができる。

となっている。

本研究では「心の教育」を推進していく上で、道徳においては、「自己理解を深め、主体的によりよく生きようとする気持ち」を育て、特別活動においては、「個性を生かしつつ、他者と支え合い生きようとする気持ち」を育てることが重要であるととらえている。さらに、総合的な学習の時間においては、自然や地域社会など広範囲での活動を通して、「理想の実現に向けての実践力」をはぐくむことをねらいとしている。本単元においては、車いすを用いて肢体不自由の疑似体験を行い、体が不自由な方の視点から、町の実態を調査し、子供なりのバリアフリーを考えていく。このことから、体が不自由な方の真の思いを知る。こうした一連の活動を通して、人生の糧となる知識・技能や地域の一員として自分のできることを考えるという「思いやりの心」を身に付けることができると考えた。

（１）地域環境を生かした体験活動の工夫

車いす乗車・介護体験では、「特別養護老人ホームこざくら荘」の介護員の方に指導をいただく。ここでは、あくまで車いすの使用、介助方法といった介護の基礎的な知識・技能面について指導をいただき、基礎的な知識・技能を身に付けることで、体の不自由な方、介護者の気持ちを理解しようとする気持ちをもつことを期待したい。

車いす乗車による町探検では、町探検の行き先として、子供たちがよく利用する商店や公共機関を設定している。また、道路の様子なども調査し、設備としてのバリアフリーについて、どのような工夫がなされているか、また、どうしたらよりよくなるのかなど、利用者の立場に立って考える気持ちをもたせたい。

体が不自由な方との交流では、体に不自由さを持ちながらお仕事をされている方からお話をいただく。子供たちが体験し感じた感じ方と体が不自由な方の感じ方とを比較し、設備面だけではなく、気持ちの面でのバリアフリーの大切さに気付き、感じられることを期待したい。

（２）指導体制・方法の工夫

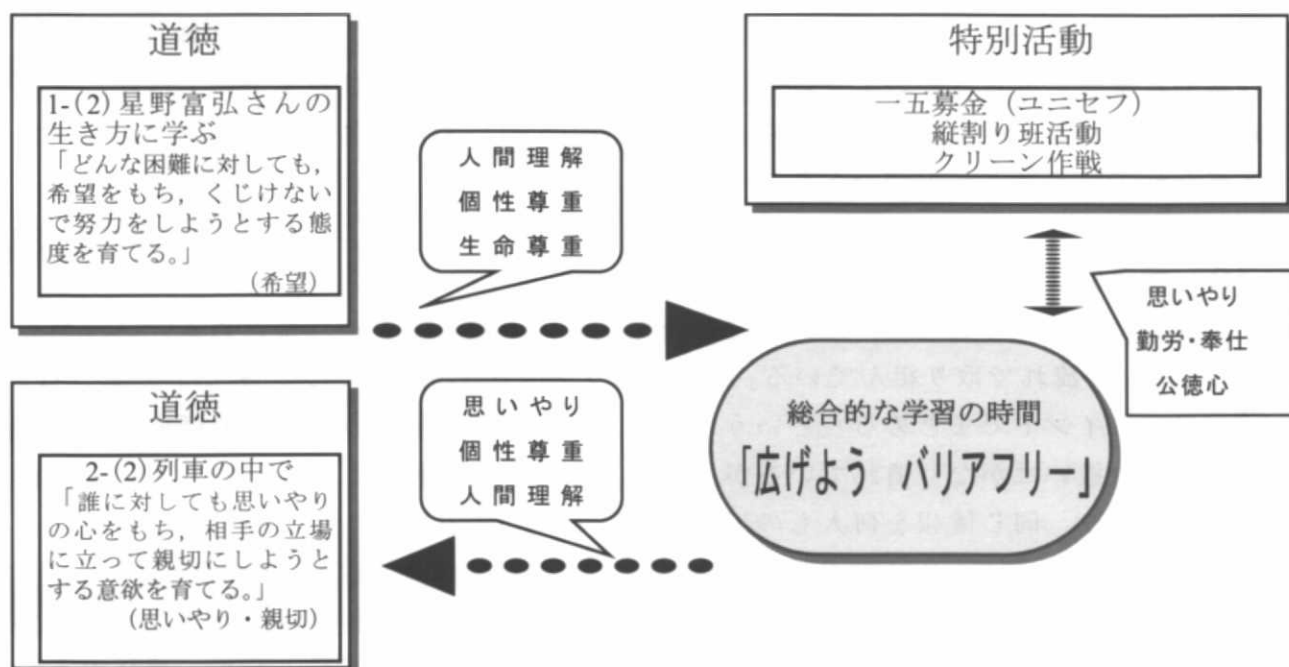
体験は、「疑似体験→実際に利用する→体の不自由な方の思いを知る」という段階を経ることにより、「学ぶ→考える→感じる」という過程を踏むことができると考えた。この

過程を踏むことにより、知識・技能の習得にとどまらない、人とかかわり、地域社会の一員としての自覚をもつ「未来を拓く力」を育成することができると考えた。

本単元では、様々な体験活動を行うため、TT体制を組み指導を行う。これにより、単元を通して個やグループの課題に即した支援を行ったり、単位時間においては、課題の意識化や、思考を整理・明確化させたりと、思考の変容を把握することができると考えた。

また、ゲストティーチャーとして、体に不自由さをもつ方や介助者の方を招くことにした。ゲストティーチャーからのお話を聞くことにより、あくまで自分の考えが中心となる疑似体験を体の不自由な方の視点から考え直したり、体の不自由な方の視点をもって町探検に臨んだりすることができると考えた。体の不自由な方の視点を継続してもちながら思考・活動することで、課題の再確認や新たな課題の発見が可能となり、更なる問題意識をもちながら思考・活動を継続させることができると考えた。

(3) 他領域との関連付けを図った指導の工夫



本単元の学習に関して、上記のような他領域との関連が考えられる。既習事項は場合に応じて想起を促したり、未習事項を関連付けながら指導したりすることで、児童の思考が連続し、幅広い面から思いやりの心の育成を図ることができると考えた。特に本単元では肢体不自由という「障がい」を扱う内容であることから、短絡的に「障がい＝不幸」といった感をもって終わることも考えられる。互いを認め合い、共に生きようとする「心」の育成のために、体に不自由さをもちながらも自立して生活している方を講師にすることにあわせ、道徳の時間を通して、障がいがあっても前向きに人生を送っている星野富弘さんの生き方について取り上げた。さらに相手の立場を考えて行動することを今後の生活に生かすことができるように、「思いやり・親切」の価値項目教材を扱うこととした。また、本単元の学習を通じて培った「思いやりの心」の実践場面として特別活動で行ってきたボランティア活動や縦割り班活動にその意義を振り返らせながら活動をつなげていくこととした。

3 単元の目標

- (1) 疑似体験や町探検などで、自分なりに工夫をし、積極的に取り組もうとする。
(主体的・創造的態度)
- (2) 疑似体験や町探検などから、自分の課題を見付け出し、計画を工夫して実行することができる。
(問題を解決する力)
- (3) 友達と疑似体験や町探検などを通しての意見や考えを発表したり、話し合ったりすることができる。
(学び方・考え方)
- (4) 疑似体験や町探検などを通して、人生の糧となる知識・技能や思いやりの心を持ち、自己の生き方を考えることができる。
(自己の生き方)

3 児童の実態

(1) 学習全般に関して

学力差はあるものの全体として学習意欲の高い児童が多い。男子の方が学力が高い傾向にあり、授業中の発言も男子の方が積極的である。そのため、男子の意見に全体が影響されることがある。児童の一人一人の発言を取り入れるため、ノートに書いたことやつぶやきを聞き漏らさないようにしている。また、発言するだけがよいのではなく、丁寧な作業をする、相手の話をきちんと聞くなど、学習で大事なことは様々あり、バランスがとれていることが大切であることを児童に伝えている。

(2) 総合的な学習の時間に関して

総合的な学習の時間では、主に「課題をもつ」→「調べる」→「まとめる」→「発表する」という流れで取り組んでいる。児童のイメージとして「インターネットで調べる」「パワーポイントでまとめる」というように、パソコンを使おうと考える傾向にある。パソコンの扱いはかなり慣れているが、インターネットで検索したことをうまく読み取れなかったり、同じ情報を何人もの児童が印刷していたりするので、検索した情報の活用の仕方については、今後の課題である。

このような現状から、今年度はインターネットの有効な活用とともに、「人とのかかわり」を大切に活動積極的に取り入れたいと考えている。手段として、地域の人をゲストティーチャーとして迎えることや仲間同士の話し合いなどを考えている。

前単元「食生活を見直そう～究極のメニューの提案に向けて～」では、自分たちの食生活を振り返ることから活動を始めた。その中で、普段何気なく食べているものや食べ方などについて「どうしてなのだろう」という疑問が出てきた(課題設定)。課題ごとのグループ分けを行い、「調べる」活動に入った。調べる活動を進めるうちに、調べることに重ならないように分担したり、調べたことをお互いに伝え合い、さらに調べることを決めていったりと、グループでの話し合いを通して活動をより深化させていくこととした。また、インターネットだけでは調べられないことがあることに気づき、「人とのかかわり」という点で、家族にインタビューするなど、実生活に即した活動を行った。

「まとめる」活動では、調べたことを交流し合い、栄養のバランスを考えたり、見た目の工夫を凝らしたりした「究極のメニュー」を提案することができた。児童にとって

は栄養バランスのとれた食生活の大切さに気付くとともに、児童同士が協力することの大切さを意識する実践となった。

福祉の学習に関しては、3年生で聴覚障がいの方の学習を行い、手話や指文字の学習を行ったり、手話通訳士の方から聴覚障がいの方の生活について学んだりした。また、4年生では視覚障がいについて学習を行い、疑似体験を行ったり、点字などについて学んだりした。このように段階的に体の不自由な人について学習を行い、今年度は肢体不自由について扱うこととなっている。また、道徳の時間においても、星野富弘さんの生き方について学ぶなど、障がいのある方に関する学習を行ってきているところである。

本単元を行うに当たり、下記の事前調査を行った。その結果から、「どんなことをしてあげたいか」という答えの中で「押してあげたい」「手伝いたい」「助けてあげたい」という答えは出てきており、子供たちは「気持ち」の面で、何かしてあげたいという思いやりの心をもっていると思われる。しかし、子供たちとの会話から「車いすを利用している人＝ほぼ全介助」という認識をもっていたり、具体的な困難な場面については理解していなかったりという実態があると考えられる。

そのため、本単元においては、疑似体験を通して課題を設定し、相手の立場で課題を意識し思考するという「課題」を基盤とした思考の連続性を意識させたり、グループで話し合う場を設定し、互いの考えを認め、グループでの考えを深めたりしていくこととしている。

また、体験活動においても、既存の情報（インターネット、書籍など）だけから判断するのではなく、ゲストティーチャーの講話、町探検といった実生活・実体験に即した考えがもてるようにしている。

～事前調査結果～ (12人中)

調査項目	はい	いいえ	はい(どんな時か)
車椅子に乗っている人と何かしたことがある。	5	7	話をした, 買い物
今まで介助したことがある。	4	8	押した, 選挙の時
なぜ, 乗るようになったと思うか。	怪我, 事故, 病気, 生まれつき, 老化		
車椅子に乗っている人をどう思うか。	かわいそう, 不便, 大変, その人なりには幸せ, 自分は幸せ		
どんなことをしてあげたいか。	押してあげたい, お手伝いしてあげたい, 助けてあげたい, いろんな所へ連れて行ってあげたい, 励ましたい		

広げよう バリアフリー

「みんなちがって…」

体の不自由な人について考えよう

「自分とちがって…」
・眼鏡をかけている
・足が速い
・背が高い
(体の不自由な人について
目を向けるようにする)

車いすを使っている方はどんな思いで、
どんな生活をしているのだろう
(疑似体験活動)

・一人でうまく動かせない
・段差が越えられない
・簡単だ ・怖い、大変だ

車いすを使っている方の生活を
教えてもらおう
(体験活動)

・そんなことも大変だったんだ
・そんなこともできる

バリアフリー探検隊
～町のバリアフリーを調べよう～
(調査・体験活動)

【スーパー、役場、体育館、駅、コンビニ、病院】

・スロープがあった
・段差が多い
・お店の通路が狭い
・高いところの物がとれない
・一人で行けない …

町をよくするために、
バリアフリーやバリアがあること、
改善案を伝えたい

・段差をなくすればいい
・スロープを作ればいい
・棚を低くすればいい
・道を広くすればいい

バリアフリーを伝えよう
～町をよりよくしていくために～
(発表活動)

自分たちができることはなんだろう？
大切なことはなんだろう？

・ちょっとした手助けができそう
・施設だけがよくなってもだめ
・助け合おうという気持ちが大切
・いろんな人の役に立ちたい

「心のバリアフリー」を広げていこう！

6 活動計画（全20時間扱い）

段階	内容・場・素材	児童の主な活動	支援と評価
課題把握	1 「ちがい」を知ろう (2) 【学校】	○自分と他の人が違うことについてどんなこと？ ・外見，性格が違う ・目の不自由な人，耳の不自由な人の勉強もしたよ ・体の不自由な人もいるね	☆一人一人の違いに目を向け，違いを当たり前のこととしてとらえているか (自己) ・体験への意欲化を図る。
	車いすを使っている人は，どんな思いで，どんな生活をしているんだろう？		
調査・追究	2 体験したり，お話を聞いてみましょう (2) 【学校】 【GT1 こざくら荘職員】	○車いす疑似体験 ・使い方，介助の方法を知ろう ・乗ってみよう ・自分で動かすのも介助するのも大変。 ・ゆるい坂や段差も難しい ・車いすの人はどうやって生活しているんだろう？	☆積極的に体験活動に取り組もうとしているか (主・創) ・グループにつき，体験の視点を明確化させる。 (TT) ☆体験を基に，課題を見付け出し，計画を立てようとしているか（問解）
	(2) 【学校】 【GT2 障がい者相談員】	○車いす利用者からの講話 ・そんなことも大変だったんだ ・そんなこともできるんだ ・この町は車いすの人にとって，使いやすいのだろうか？	・体験や GT のお話を通して，自身の問題意識につなげるようにする。 ・相手意識を明確にした目的をもたせられるようにする。
	(4) 【町内各施設】	○バリアフリー探検 ・バリアフリーがあった ・こんなところも大変だ ・町には，いいところもあるし，不便なところもあるぞ	・自分にとってではなく，車いす利用者にとってどうであるか，視点を確認させながら活動を行う。 ・グループに付き，気付きや視点を広げる。(TT)
	3 バリアフリーを伝えよう (6)	○調査報告・改善案作成 ・バリアフリーやバリアがあること，改善案を伝えたい	☆体験を振り返り，工夫してまとめることができたか (学び・考え)

<p>【学校】</p> <p>【GT1・GT2】</p> <p>(1)</p> <p><本時1/2></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他のグループの調べた施設はどうだったのだろうか？ ・分かりやすく発表しよう <p>○バリアフリー発表会</p> <p>○講師の方からの感想</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・子供自身のもつ問題意識が明確化されるように促す。
<p>GT1 :</p> <p>車いすの人だけでなく、高齢者などの体に不自由さをもつ人にとっても住みやすくなる。介助する人間にとっても楽になる。</p> <p>GT2 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施設が変わることで、車いすの人にとって住みやすい町になることができる。自分でできることや活動範囲が広がり、楽しみが増える。もっと町に出てみたいと思える。 ・どの施設も、できる範囲（金銭面、既存の施設の活用）で、バリアフリーを進めようとしている。 		

整理・深化

<p>4 バリアフリーをもう一度考えよう</p> <p>(1)</p> <p><本時2/2></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・体の不自由な人にとって、完ぺきなバリアフリーではない ・完ぺきではない部分はどうしたらよいのだろう <p>○グループで考えたバリアフリー改善案を見直し、発表する。</p>	
--	---	--

自分たちができることはなんだろう？

	<ul style="list-style-type: none"> ・高いところの品物は取ってあげればよい ・通りやすいように品物をどける ・代わりにやってあげる ・周りにいる人に助けを求める 	<p>☆自分の意見や考えを表現し、話合うことができるか（学び・考え）</p>
<p>【GT2】</p>	<p>○講師の方の講話</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・施設がよくなってくれることはうれしいこと。でも、それ以上に、みんなが助け合う気持ちをもっていれば、施設が多少不便でも、楽しく活動することができる。 ・困っていることは、お互いに助け合うことが当たり前であり、それは体が不自由とかそうではないとかということとは関係ないことである（体験談など）。

心のバリアフリーを広げよう！

	<ul style="list-style-type: none"> ・施設も大切だけど、気持ちが一番大切なんだな ・車いすの人だけじゃなく、いろんな人の役に立ちたいな 	<p>☆活動を振り返り、周りの人に思いやりの気持ちをもつことができたか (自己)</p>
<p>5 これからできることを振り返ろう (2)</p>	<p>○体に不自由さをもついろいろな人の思いを知ろう。</p> <p>○車椅子以外の補助具や共用品について知ろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・NHK「道徳ドキュメント 使いやすさを広めたい 共用品」 ・つえ，補助車，リフトカー ・共用品 	<p>☆社会の役に立つ仕事をしようとする気持ちをもてたか (学び・考え)</p> <p>☆日常生活の道具や表示などに関心を持ち、工夫してよりよい生活を送ろうとする気持ちをもつことができたか (自己)</p>



7 授業の実際

(1) 本時の目標

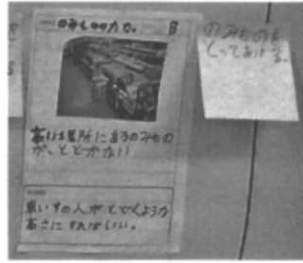
- ・町探検を通してまとめた自分の意見や考えを发表或し、話し合ったりすることができる。
(学び方・考え方)
- ・町探検を通して考えたことや、講師の方からのお話を基に、これからの自分にできることを考えることができる。
(自己の生き方)

(2) 本時の展開

学習活動	児童の活動と主な発問	支援・評価の実際
<p>◇これまでの学習の振り返り(5)</p> <p>◇町探検発表会をしよう</p>  <p>◇GTから一言コメントをいただく</p>	<p>住みやすい町になるように、町探検で調査したことや、改善案を伝えよう</p>  <p>たなの上にある品物に手がとどきませんでした。たなを3段くらいに低くするとよいと思います。</p> <p>○グループの発表終了後に意見交流</p>  <p>飲み物のドアがあげにくいなんて初めて知りました。</p> <p>どうして不便だったんですか？</p> <p>○GTのコメントを聞く</p>	 <p>☆意見や考えを發表しているか (学び方・考え方)</p>
	 <p>施設が変われば、できることが増え、住みやすい町になるんだね。どの施設も、できる範囲で、バリアフリーを進めようとしているね。</p> <p>GT2：障害者相談員</p> <p>高齢者などの体に不自由さをもつ人にとっても住みやすくなるね。いろんな施設が便利になると、介助する人間にとっても楽になるよ。</p> <p>GT1：こざくら荘職員</p> <p>車いすの人の立場に立って考えているね。その気持ちを忘れないでください。</p>	<p>・GTによる他者評価で、成就感を感じさせるとともに、バリアフリーに関する視点を明確化した。</p>
<p>◇バリアフリーについてももう一度考えよう</p>	<p>○調査してきたバリアで困っている状態を想起させる</p> <p>自分たちができることは何だろうか？</p>   	<p>・振り返る時の視点を明確化した。(TT)</p> <p>・付せんを利用し、それぞれの考えを示させた。</p>



- グループで考えた改善案を振り返る
- ・ グループで考えをまとめ、発表する



自分たちでは改善できない

【施設・設備の改善】

- ・ スロープを付ける
- ・ 柵を低くする
- ・ 通路の幅を広くする
- ・ 段差をなくす

視点の変化

【自分ができること】

- ・ 代わりに取る
- ・ じゃまな物をどける
- ・ 車いすを押す
- ・ 周囲の人に助けを求める

自分たちがあにもぞでき

- ◇ GTの方の思いを聞いてみよう



- GTの講話を聞く

- ・ 施設が整備されることは大切。それ以上にみんなが助け合える気持ちをもつこと、その気持ちをもって、(子供たちが考えたように)自分たちができんことを考えることがもっと大切。
- ・ 助け合うことは、体が不自由な人ばかりではなく、友達どうしに対しても同じ。
- ・ できんこと、できんことは誰にでもある。できんことを自慢したり、できんことを非難したりするのではなく、お互いに助け合おうという気持ちをもってほしい。



- ◇ 今後の自分について考える

- GTのお話を聞いて、町探検を行っている時と比べて自分の考えが変わったこと、これからやろうと思ったことを考える
- ・ プリント記入、発表

- ・ GTの講話を想起させ、それに基づいた考えをもてるよう促した。

施設・設備だけがよくなってもだめなんだ。

ほかにも、自分ができることはなかなかな?



困っている人を見かけたら、考えたい。

お互いが助け合えば、みんなが幸せに暮らせる。

☆活動を振り返り、周りの人に思いやりの気持ちをもつことができたか (自己の生き方)

- ・ 「気持ち」という価値感に気付けたことを評価した。

心のバリアフリーを広げよう!

- ◇ 今日の学習を振り返ろう

- 価値を明確化し、実践への意欲をもつ
- ・ 考えの変化や感想をGTに見せ、交流する

- ・ GTによる評価で、成就感を感じさせるとともに、実践への意欲を高めさせた。

助け合おうという気持ちの大切さを忘れないでいてください。

誰に対しても思いやりの気持ちをもっていてください。



8 成果と課題

(1) 地域環境を生かした体験活動の工夫

[成果]

- ・地域の方をゲストティーチャーに迎えたり、調査活動の場を身近な施設に設定したりすることにより、より興味・関心をもって意欲的に活動に取り組むことができた。
- ・ゲストティーチャーを2回招くことにより、発表活動の中で相手意識が高まり、「伝えたい」という気持ちをもたせながら活動を継続させることができた。

(単元終了時の
児童の感想より)

・改善案を発表するときには相沢さんがいらっしやって、直接伝えることができたのでうれしかった。

・相沢さんや谷藤さんといっしょに学習することができて、とてもうれしかったし、大切なことを学ぶことができて、よかったです。

[課題]

- ・ゲストティーチャーについて、単元及び単位時間のねらいに合った役割をさらに精選することが必要であった。話してもらう内容を細かく打ち合わせたり、児童とかかわる場を増やしたりすることで、更に効果的な活用が可能になると思われる。

(2) 指導体制・方法の工夫

[成果]

- ・地域の方から介助方法を学んだり、車いす利用者の方と触れ合ったりした後に、実際に車いすに乗って調査・活動することにより、擬似的ではあるが、当事者の思いを感じることができていた。

(単元終了時の
児童の感想より)

・最初は「かわいそう」と思っていたけれど、みんなの気づかいやバリアフリーなどでいろんなことができることが分かった。手伝えるところを手伝いたい。

・これからは、障がいがある、ない、車いすに乗っている、いないということに関係なく、ただ「困っている人」の手助け・手伝いをしたいです。

- ・4人グループを、さらに2人ずつ分けることにより、グループ内での相互評価が可能になり、発表内容を更に深めることができた。
- ・「疑似体験→実際に車いすを利用する→体の不自由な方の思いを知る」という段階を経ることにより、「学ぶ→考える→感じる」という過程を踏むことができた。
- ・問題を解決しようとしたり、自分たちができることを考えようとしたりする意欲を高めることができた。

[課題]

- ・TTの活用について、ねらいや単位時間内での動き、視点が明確ではなく、児童の気付きなどを深めさせることができなかった。
- ・単元を通した課題がなかったため、児童がその時に行っている活動の目的や今後の見通しをもつことが不足していた。

(3) 他領域との関連付けを図った指導の工夫

[成果]

- ・「星野富弘さんの生き方を学ぶ」という道徳の単元を事前に行うことにより、「障がい」＝「不幸ではない」、「障がいがあっても前向きに生きている人がいる」という視点を、単元を通してもち続けることができた。また、読書感想文の中で本単元の内容を思い起こすなど、日常への意識化が見られた。

[課題]

- ・「福祉分野」においては、他学年との系統的な単元計画があるため、それを指導案に示すことで、現単元でのねらいや活動がより明確になると思われる。

今までは気づかなかったけど、町には車いすの人には不便なところがありました。逆に工夫しているところもありました。

(略)

心に残っている言葉が二つあります。一つは「障がいは不便ではあるが不幸ではない」「一人一人が共に暮らす一人一人の人間なんだ」

(略)

体が不自由でも、必ずしもかわいそうではなく、信頼できる仲間と生活できるのです。

(児童の読書感想文より)

IV 研究の成果と課題



1 道徳の時間の指導に関して

2 特別活動の指導に関して

3 総合的な学習の時間の指導に関して

研究の成果と課題について

今年度は、「未来を拓く力を育成する『心の教育』の実践的研究～自分を見つめ他と豊かにかかわる力を養うために～」の研究主題について、2年次の研究を推進してきた。

前年度の成果と課題を生かし研究を深めるべく、指導体制と方法の工夫に重点を置き、他領域との関連付けを図りながら、理論研修と研究協力校・研究協力員による検証授業を行った。その結果、次の成果と課題を明らかにすることができた。

視点1 道徳の時間の指導に関して

今年度の重点： 自他の経験や考え方を生かし活動する中で、道徳的価値観をはぐくむ指導の工夫

成果

子供の実態と学校の特色を考え、身に付けさせるべき道徳的価値に沿った資料の活用や指導方法の工夫を実践することができた。

教師が自作した資料は、学校行事として行われる球技大会を題材としたものであった。話し合い活動の過程で意見が異なったり、自らの意見を示すことをためらったりするなど、子供たちが日常的に経験し実感を伴って読むことのできる内容に工夫されていた。そのため、子供たちは関心をもって資料を読み登場人物の心情を十分理解した上で自らを振り返り、さらに意見交流によって考えを深めることができた。

意見交流については、小集団での話し合い活動を十分行った後に、短冊や掲示物を活用して全体交流を行った。学級の実態に照らし合わせ効果的な指導方法を工夫したことにより、子供たち一人一人が自分の問題としてとらえ、自主・自律や公正・公平などの道徳的価値について考えを深めることができた。

これまで子供たちが特別活動などの他領域で経験してきた「自分の考えに責任をもつこと」について、道徳の時間において深化することができたことも大きな成果の一つであった。

課題

道徳の時間に活用する資料については、様々な工夫や配慮が求められることが再確認された。本年度の実践においては、子供たちの実態を重視し自作資料を活用した。特に自作資料の場合、身に付けさせたい道徳的価値を明らかにした上で、ねらいに迫ることのできる臨場感ある資料を作成できるよう意図することが大切である。

話し合い活動を行う場合、そのねらいに沿ったグループ構成を講じる必要がある。個々の子供の実態を加味しグループの人数も熟慮した上で、最も効果的な指導方法を実践することが重要である。

道徳の時間の指導については、他の教科や領域との位置付けを計画的に行い、それぞれの道徳的価値を重点化して配列することが求められる。そのことによって、道徳的心情や判断力、実践的態度はさらに深められるよう計画的道徳教育を行うことが必要である。

視点2 特別活動の指導に関して

今年度の重点： 自らの考えを表現し集団で考えを深める中で、生活にはたらく実践力を養う指導の工夫

成果

生徒会活動の一環として行ってきた地域の除雪活動について考える学習は、既存の活動を生かし豊かな心をはぐくむ有意義な取組であった。恒例化した学校行事の意義を見直し、よりよいものにしようとする活動は、子供の意欲喚起につながった。また、各自が考え学級で話し合った改善案を要請書にまとめ、生徒会本部に提案することを前提としており、自らの取組が学校生活に役立てられる充実感にもつながった。

また、地域の人々とのかかわりを題材としたことで、他者と支え合い生きることについて考え、道徳の時間など他領域との関連付けも深められた。さらに、総合的な学習の時間における壁新聞づくりなどに、本実践を生かすことも考えられ、道徳教育の充実という観点から有意義な取組となった。

課題

グループにおける話し合い活動を行う場合、その目的を子供たちに明確に理解させることが重要である。そのことにより、単なる意見交流にとどまらず、話し合いの中で意見を相互評価し考えを深め合う点に、集団活動の一つの意義がある。また、話し合い活動を支援するための指導体制としてティームティーチングを実践する場合は、その方法を吟味することも大切である。教師がそれぞれの担当グループを決め支援や見取りを行うことで、話し合い活動が更に充実したものとなることも考えられる。

各学校で行われている特別活動の中には、豊かな心をはぐくむために大きな役割を担う活動が多くある。そのため、子供の実態を踏まえ身に付けさせたい道徳的価値を明確にし、他領域と関連させた特別活動を計画的に行う必要がある。

視点3 総合的な学習の時間の指導に関して

今年度の重点： 地域人材や環境を生かし探究活動を行う中で、生き方を考える態度をはぐくむ指導の工夫

成果

地域の商店や公共施設について調査活動し、また地域の方をゲストティーチャーとして招き、ティームティーチングを行うなど、地域環境を有効活用したことで大きな学習成果がもたらされた。ゲストティーチャーの指導協力は2回にわたり行われたため、子供たちの変容に対する評価が、客観的に説得力をもって行われた。調査活動においても、複数教師によるティームティーチングを実践したため、子供たちの気付きを支援したり発表活動における見取りや評価を詳細に行ったりすることができた。

発表活動に関して、各グループを更に2つに分け発表に取り組みさせたことで、グループ内での相互評価が行われ考えの深まりが見られたり、全体での発表活動に互いの意見が生かされたりと学習効果が高まった。

道徳の時間に体の不自由な人について考えたことで、車いすの体験活動の中で子供たちの思考が深まるなど、他領域と関連によって充実した学習が行われた。

課題

他教師やゲストティーチャーとのチームティーチングについては、指導の目的や支援方法などを吟味し指導体制を築くことで、高い学習効果が期待できる。そのためには、単元を通した目標や計画を明確にすることが必要であり、目標や課題に照らし、最も効果的な指導体制・方法を工夫することが重要である。

総合的な学習の時間においては、異学年で同一のテーマに基づいた学習を行う場合もある。他学年の活動との関連を踏まえ、系統的に学習を進めることが必要である。

参考文献リスト

- ・小学校学習指導要領（平成10年12月告示）
- ・中学校学習指導要領（平成10年12月告示）
- ・釧路教育研究所 研究紀要 第57集，第58集，第59集
- ・十勝教育研究所 研究紀要 No.198，No.200
- ・石狩教育研究所 研究紀要 第185号
- ・後志教育研修センター 研究紀要 No.73
- ・北海道空知教育センター 研究紀要 第178号
- ・「第15回 北海道生活科・総合的な学習教育研究大会 大会紀要」
- ・「平成16年度 研究紀要 苫前町立力昼小学校」
- ・「留萌管内生活科・総合的な学習研究会 第4回実践交流会 講演資料」
- ・「小学校学習指導要領解説 特別活動編」 文部科学省
- ・「小学校学習指導要領の展開」 宮川八岐編著 明治図書
- ・「中学校学習指導要領の展開 道徳編」 七條正典編著 明治図書
- ・「中学校学習指導要領の展開 特別活動編」 森嶋昭伸・鹿嶋研之助編著 明治図書
- ・「中学校学習指導要領の展開 総合的学習編」 山極隆編著 明治図書
- ・「学級活動の年間始動計画と展開 小学校低学年」 宇留田敬一編 明治図書
- ・「学習活動の指導過程 小学校低学年」 成田國英編 明治図書
- ・「小学校・キャリア教育のカリキュラムと展開案」 児島邦宏・三村隆男編 明治図書
- ・「道徳と総合的学習で進める心の教育」 諸富祥彦・尾高正浩編著 明治図書
- ・「総合的な学習に活かす ポートフォリオがよくわかる本」 小田勝己 学事出版
- ・「中学校『総合的な学習の時間』研究の手引」 児島邦宏・佐野金吾編 明治図書
- ・「資質・能力を育てる 中学校道徳編」 七條正典・谷合明雄・峯川一義・山田一彦編著 明治図書
- ・「中学校 特別活動＋総合的学習の展開プラン集」 渡部邦雄編 明治図書
- ・「ティーム・ティーチングを生かした総合的な学習の実践」 釵持勉編著 明治図書
- ・「教育展望」2003.7, 2003.8
- ・「指導と評価」2006.5, 2007.7
- ・「特別活動研究」2006.3, 2006.12
- ・「初等教育資料」2004.9, 2007.7, 2007.8, 2007.10

研究協力校

留萌市立沖見小学校（共同研究担当：鹿島嘉節）

天塩町立天塩中学校（共同研究担当：大川智弘）

研究協力員

梶倫之（幌延町立幌延小学校）

山田洋一（天塩町立天塩小学校）

加藤晃彦（小平町立鬼鹿中学校）

石垣友和（留萌市立港南中学校）

留萌管内教育研究所

所長 檜森博仁

主任研究員 嶋本敏幸

研究員 安居和

西條直志

山形勉

滝本都子

宮崎友美

室本博

中村弘樹

昨年度、新たな研究主題「未来を拓く力を育成する『心の教育』の実践的研究」を設定し、その成果と課題を基にスタートした2年次の研究でした。今年度は、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の各領域とも指導体制と方法の工夫に焦点を当て、理論研究を進めるとともに、研究協力校と研究協力員の先生に検証授業を提供していただき、活発な議論を行いながら研究を深めてまいりました。

この度、今年度の研究成果を『研究紀要』第13号としてまとめることができました。これもひとえに、共同研究推進のために御尽力いただいた研究協力校と研究協力員の皆様方、そして、今年度検証授業を提供してくださった、幌延小学校、天塩中学校、鬼鹿中学校の御理解と御協力によるものと心より感謝申し上げます。

また、紀要発行に当たり、各関係機関にも多大なお力添えをいただきましたことに対しましても、重ねて御礼申し上げます。管内教育の充実のため、本書を広く御活用いただけると幸いです。

来年度は、本研究のまとめの年に当たります。3領域の連携を図った指導の工夫を中心に、これまでの成果を生かし、課題を改善しながら充実した研究内容となりますように努力してまいりたいと思います。今後とも当研究所に対しまして、変わらぬ御指導、御協力のほどよろしくお願い申し上げます。

平成20年3月

研究紀要 第13号

未来を拓く力を育成する「心の教育」の実践的研究

～自分を見つめ他と豊かにかかわる力を養うために～

発行日 平成20年3月14日

発行所 留萌管内教育研究所

〒077-0033 留萌市見晴町2丁目27番地

Tel・Fax (0164) 42-2635 (直)

E-mail ruken@educet.plala.or.jp

U R L <http://academic3.plala.or.jp/ruken/>

発行者 所長 檜 森 博 仁

印刷所 はくおう印刷株式会社

〒077-0044 留萌市錦町2丁目3-20

Tel (0164) 42-1111
